國語讀本

新制版

巻八

375.9
Ue4
資料室

42514
教科書文庫
4
810
44-1933
20000
53577

資料室 375.9 Ue4

文部省檢定濟
昭和八年二月廿五日●中學校國語漢文科用
昭和九年七月廿四日●實業學校國語科用

國語讀本 卷八

新制版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

國語讀本　卷八

目次

前篇

一　秋の力　綱島梁川　一
二　自然の心友　藤岡作太郎　四
三　月の前　上田秋成　一四
四　峠　田部重治　二三
五　倫敦塔　夏目漱石　三一
六　春夏秋冬　四〇
七　謠曲の中心趣味　五十嵐力　四二

広島大学
教
53577
図書

八 羽衣 五一
九 金槐集を評す 齋藤茂吉 五八
一〇 秋の夕ぐれ (新古今和歌集) 六八
新古今時代の歌 石原正明
一一 ベートーヴェンの一生 中澤臨川 七一
一二 和藤内 近松門左衛門 八一
一三 近松門左衛門 佐々政一 九一
一四 才覺の軸すだれ 井原西鶴 九六
一五 建國の歌 北原白秋 一〇二
一六 玉勝間 本居宣長 一〇六

一 あらたなる說を出す事 一〇六
二 新に言ひ出でたる說 一〇七
三 わがをしへ子に誡めおくやう 一一〇
四 おのが物學びのありしやう 一一一
一七 國學者の業績 岩城準太郎 一一六
一八 日本民族の獨創力 田中寛一 一二四
後篇
徒然草抄
徒然草に就いて(參考) 新村出 一
一 つれ〴〵なるまゝに 七

二 此の木なからましかば 八
三 同じ心ならん人と 一〇
四 旅 一〇
五 折節のうつりかはり 一一
六 心なぐさむ事 一四
七 末の世とはいへど 一五
八 諒闇の年 一六
九 過ぎにし方 一六
一〇 人の亡きあと 一七
一一 雪のあした 一九

一二 荒れたる庭 一九
一三 法然上人 二〇
一四 木の股の法師 二一
一五 稲葉の露 二三
一六 石清水詣 二四
一七 足鼎 二四
一八 名を聞くより 二七
一九 いやしげなるもの 二七
二〇 入りたゝぬさま 二八
二一 人の心 二八

三三 下部に酒飲ますること 二九
三三 猫また 三二
三四 もろ矢 三三
三五 寸陰惜しむ人なし 三三
三六 高名の木登り 三五
三七 唐のものは 三六
三八 花はさかりに 三六
三九 能をつかんとする人 四一
三〇 一道にたづさはる人 四二
三一 さしたる事なくて 四三

三二 降れ〳〵こ雪 四四
三三 松下禪尼 四五
三四 第一の事を 四六
三五 最明寺入道 五〇
三六 人の物を問ひたるに 五一
三七 主ある家には 五二
三八 聖海上人 五三
三九 佛問答 五四

目次終

國語讀本　卷八

前篇

綱島梁川

綱島梁川名は榮一郎。倫理學者。岡山縣の人明治四十年歿、年三十五。あれこれあれこれを集めて春の朧かな（芭蕉）

一　秋の力

「あれこれをあつめて霞む春の朧」を人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れいづる節くれだちたる樹身、枯芝生の底より躍りいづる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。

中にも秋の力を最も強く贍（ゆた）かに言ひいづるものは、黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて云く、「われ嘗てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに結び出でたる赤柿の累々たるを

見て、始めて秋こゝにありと叫びき。」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を措きては、またとあらじ。秋は實に個の累々たる赤柿、其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。そのむかし蕪村・抱一などいふ畫家が、寥々たるこの一物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く隈なく淋漓揮灑し出せる、詩眼流石に凡にはあらざりけり。

綱島梁川

見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帶び、星に聲あり。（落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟・地籟の砰湃として厲しき、あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ空明・照徹・剛克・雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべて哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。）秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接するなり。

秋は何等の天文・地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々たり、故に明瑩なり、澄徹なり、而してまた充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脱ぎすてて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし秋に一味の文采ありとせば、白蘋・紅蓼の裳裾、蘆花・淺水の帶、桔梗・苅萱・尾花が波の袂も輕き姿なるべし。

蕪村　與謝氏。俳人。畫家。天明三年（一七八三）歿、年六十七。

抱一　酒井忠因。畫家。文政十一年（一八二八）歿、年六十八。

あはれ其の澹如たるすゞしさは、彼の哲人・道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。（病間錄）

二　自然の心友

藤岡作太郎

藤岡作太郎　金澤の人、東圃と號す。文學博士、明治四十三年歿、年四十一。

俊成　藤原氏、定家の父、平安朝末期の歌人、千載集の撰者。

定家　藤原俊成の子、鎌倉時代の歌人、古今集・新勅撰集の撰者。

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。「その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉・室町の世、「抑、歌道に於て、定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず。近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は、なほ如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名、今に嘖々たるは、抑、何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天禀なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衞尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。

西行法師

されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、「嘗て同族左衞門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騷ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死したまへりとて、若き妻、老いたる母の、重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を

辭して許されざれども「棄恩入無爲」は如來の教なりと觀じ、四歲の女が、父の歸れるを喜びて、取縋れるを思ひ切りて、緣より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。」と。かくて、名を西行又は圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歲まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奧州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。」と。一个の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適、興至れば即ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。

保延　崇德朝の年號。

右幕下　右近衞大將源頼朝。

大師　弘法大師。

高尾　京都市右京區高雄山神護寺。

文覺　俗名遠藤盛遠、源頼朝時代の傑僧。

數奇を立てゝ、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。」と。その後、高尾の法華會に、行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば「西行と申す者。」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて「年頃承り及びたるに、御尋ね悅び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちは、いかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰に違ひたるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いふがひなの法師どもや。あれは文

文覺上人

覺に打たれんずる者の面樣か、文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なむ
そのきさらぎの望月のころ

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

わが國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者、前後僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折

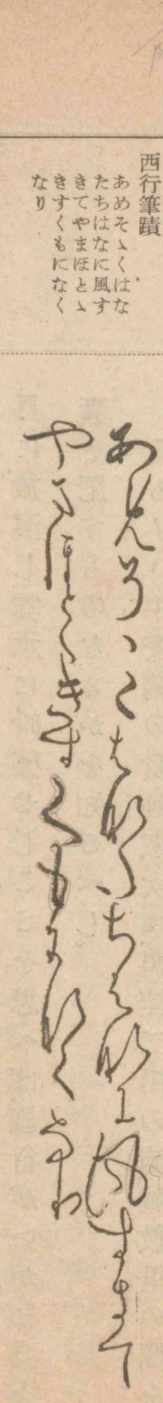
雙林寺　京都市圓山公園の南にある天台宗の寺。
建久　後鳥羽朝の年號。
宗祇　室町時代の人、連歌師。
芭蕉　伊賀の人、元祿頃の俳人。

をも厭はず、西行に私淑して其の跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おの〳〵その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そも〳〵平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、幾外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、從うて思想の發展もあることなし。見聞するところは、東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を受け、たゞ同じ詞花言葉を飾るの

應仁亂離　應仁元年（一四六七）正月亂起る。細川勝元・山名持豐洛中に對戰し其亂十一年に及んだ。
元祿　五代將軍綱吉の頃

みにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の上にも、おのづから典型を生じて天眞を忘る。實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その內容は空しく、滔々として風を成せる時、西行一人蹶起して、從來蹈襲せる典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然の隱微なる聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠じ給へることの、世上一般の題詠と撰を異にすればなり。わけて、西行が歌ふところ、一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名



西行筆蹟

あめそゝくはなたちはなに風すきてやまほとゝきすくもになくなり

聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、亦宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てゝ直ちに自然の堂奧に入らんとす。深く山川草木を愛して、之を視ること猶己を視るがごとく、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり
いまいくたびか春にあふべき

こゝに亦我が住みうくてうかれなば
松はひとりにならむとすらむ

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、總て世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば
何につけてか日をおくらまし

うちつけにまた來む秋の今宵まで
月ゆゑ惜しくなるいのちかな

（愛着は迷なり。この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。強ひて之に着するは、亦妄執の種なりと雖も、これを以て窓前日夜の友とす、清淡虚無、一心も亦物によつて動かされざること山の如く、機に從うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境を去つて、安心は漸く決定すべし。）

今更に春を忘るゝ花もあらじ
安く待ちつゝ今日もくらさむ

雲にたゞ今宵の月をまかせてむ
厭ふとてしもはれぬものゆゑ

世を擧げて剪綵の末技に汲々たる時、巍然として衆を拔いて立ち、獨り因襲の宿弊を捨て、直ちに自然に接觸して、感ずるところ卽ち歌となる。その歌は、企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども
月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せむ
怪しきまでに袖しをれけり

時には率直にして活氣あること、次の如きものあり。

瀨戸わたる棚なし小舟こゝろせよ
あられみだるゝしまき横ぎる

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあ

らず。天籟吹き來つて松濤卽ち鳴る、その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦强し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歲の下、愈、光を增して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

（國文學全史）

上田秋成

大阪の人。國學者。文化六年（一八〇九）歿、年七十八。

それの年

文治二年。後鳥羽朝。

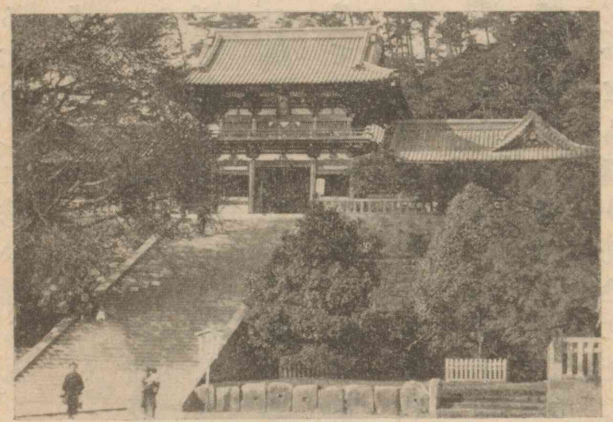
大將殿

右大將源頼朝。

三　月の前

上田秋成

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遲からず、列を亂さず、練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して「あな」とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有樣なり。



鶴ケ岡八幡宮

廣前を罷りて御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと痩せ黑みづきたるに、衣・杖・笠なども乞食者の樣したるを、鋭き御眼尻にとゞめさせ給ひ、たゞ人ならずや思しけむ「あの法師が修業するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿ぞひの若侍、急ぎ走り寄りて「ありがたく御目給へり。何處よりの修業ぞ、名をも申せ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる樣して「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召され

て、「さればこそ聞知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ。」とて召連れさせ給へり。

御館に入らせ給ひ、御裝束あらためさせ給へば、やがておほとなぶら數多てらし掲げたり。「けふの道行づと率てこ。」と仰せ給ふ。「法師まゐれ。」とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思しみて、身は黑く窶したれば、月花の譽は物の心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉ども多く拾ひをさめたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。

「いとも輝かしきにぞ、たゞ夢路を辿るやうに侍りて、聞え奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見あらはされて侍るこそいとも有

穴熊
西伯將ニ出獵ントスルニ卜シテ之ヲ。曰ク非レ龍非レ彲ニ非レ虎ニ非レ羆、所レ獲霸王之輔。於レ是ニ西伯獵、遇ニ太公於渭之陽ニ。（史記、齊太公世家）

八百日ゆく
八百日ゆく濱の眞砂を君が代の數にとらなん沖つ島守（後德大寺實定）

難けれ。伊勢の海清き渚におりたつならひは侍れど、よろしき貝をだにえ拾ひ侍らぬに、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にも豫て學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器の大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍る。大空に羽うちて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞え上ぐべき。あな畏し。」と申す。

打笑ませ給ひ、「弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝは如何に。」「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍に立たせ給ひし、その御歌を

大風起り
大風起兮雲飛揚。威加二海内一兮歸二故郷一。安得二猛士一兮守二四方一。
（漢高祖、大風歌）
烏鵲南に
月明星稀。烏鵲南飛。繞レ樹三匝。無二枝可一レ依。（魏曹操、短歌行）

讀み見奉れば猛く直々しく調もいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや歌よまんとては、ますらをの心を取隱し、あてになよびかにのみ詠みいでまくすることこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝに打詠ませ給はんには、今の世の人、誰かは竝びあへ奉らん。三尺の劒を取りて、「大風起り雲飛揚す。」と歌ひ、槊を横たへて「烏鵲南に」と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも、初よ

上田秋成

秀郷
鎮守府將軍藤原秀郷。圓位の祖。

り優れたらんは鬼にこそ侍らめ。」といふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、賴もしき人の心ならずや。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。」「こは益ゝ恐ある御問はせなり。御物語の果て〳〵は、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の痩法師にだに問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、烏滸がましく、何をかは家の傳はりなどて聞え奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈しみをさへ仇なるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦ひかんすべだに心にもとゞめ侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし罰を輕くせよ。』と云ひしと、『任

病める士卒

卒有ニ病レ疽者一、吳起爲吮レ之。

（史記、吳起傳）

竈を減じて

齊の孫臏が魏の龐涓を攻める時、日毎に竈の數を減じ兵卒が次第に散じ去るの狀をなして弱を示したこと。史記孫武吳起傳に見える。

ずるものを辱しむれば危し。』と云ひし事とのみ。病める士卒の疽を吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを餘所ながら聞き奉るには、この方の御問、免させ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、「口とく、心さかしき法師なり。今宵は月見る夜ぞ、人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒呑まざるべし、鹿・猿の中に立交りて歌・詠めといふとも、詠むまじ、たゞ我が前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに喰ひちらす人々は暖かにもこそ。風ひやゝかなるに、この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀をもて作れる、猫の形したるを取傳へて、「君より賜はす。」とて、前に置きたり。「鹿・猿はなほ心猛し、鼠をだにえ捕らぬ瘦法師がためには、げに似つかはしき御賜物ぞ。」

とて、三度押戴きぬ。

あした、御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、括り袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。」とて、かのきら〳〵しき物を與へて、顧みもせで立去りぬ。童打驚きて、「これ見給へ、見も知らぬ法師の、見も知らぬ物賜ひつるは。」とて、靑侍に見すれば、目口をはたけ、「かく尊き寶物を誰かは得させん、

菊池容齋畫

—— 峠（秩父の峠路） ——

拾ひやしつる。」といふ。「さらに更に、道のそらに斯かる物やはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りてたまへ。」といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいでて、しかくの事なんと申す。「いと怪し、大將殿の法師に賜ひしを、爭で童には得させけん、訝し。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君、打笑み給ひ、「かの似而非法師、あなづらはしく、幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。」とて取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、「右府は寔にねぢけたる君なり。口に蜜あれど心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生れ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御

口に蜜あり
口有レ蜜、腹有レ劍。（通鑑綱目）
漢高云々
漢高は漢の高祖。孟德は魏の曹操の字。

秋の夕暮
心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ（西行）

田部重治
富山縣の人。英文學者。法政大學教授。

齋の、此の後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物がたりきこなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、打顰みぬべし。（藤寳冊子）

四　峠

田部重治

人間の部落と部落とを隔離する山脈を横斷して、人間と人間とを結び付けようとする峠は、どこまでも人間的な情趣をもつてゐる。峠は、人間と人間とのなつかしいあこがれ、つながりの象徴である。それは、又、人間の惱み・喜び・希望・怒り・焦燥・失望、凡て人間らしい感情のとゞろきを、人間の刻々動く歩みと共に感じた歴史をもつてゐる。何とそれは多くの人間のあゆみと共に、多くのうつり行く人間的變化を經驗したことであらう。何とそれは自然の變

化により、自らの變化をも經驗したことであらう。

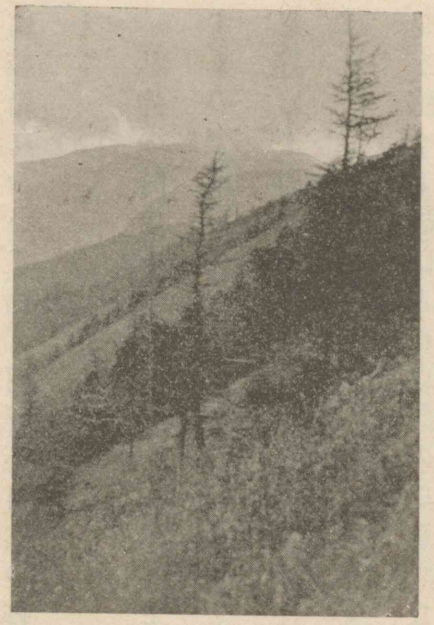
人間が人間を求めて、足がそれに向ふことは、最も無意識になされた。それは殆ど本能的な探求と云つてもよいものであつたらう。それは峠となつて多くの人に認められる前に、僅かな人々によつてのみ辿られた。そして極めて自然的な仕方によつて歩まれた。流にそひ、倒木を避け、岩をめぐつて足跡がつけられたに相違ない。しかし、自然は時々かはつて行く。流は變り、地形は變化し、山は壞れ、岩は落ちる。さうする毎に、止むを得ざる變化は、峠道に時々なされる。一見、必ずしも自然的・合理的でないやうに見える上下が作られる。さうして生ずるものは、峠の道の絶えざる變化である。必ずしも合理的に行つてゐない峠の上下である。

しかし、人間は功利的にのみ動くことを欲しなかつた。彼はさ

うした色々の欲望の間にも、いつも無關心なる美の感情の滿足を無意識に欲求した。されば峠道は甚だしく功利を傷つけない程度に曲げられ、眺望を滿足せしめるやうに作られた。そして、それは結局において、殆ど何等不自然の跡をとゞめないかのやうに見える。

私達の峠を喜ぶのは、それが人里と人里とを結ぶことにのみ存するのではない。若しさう云ふことで峠に滿足を求むるならば、私達はそれが低いほど、それが容易であるほど、或は更に極言すれば、それが無いことに最も滿足を感ずるであらう。私達が峠に滿足を感ずる故は、それは此の功利的な人間的感情を充すと共に、登山そのものと同じ種類に屬する感情をも合せて滿足せしめるからである。

登山の目的が初めから山頂を極めることにありとすれば、峠の目的はなるべく低きを求めて高きを避けようとする。故に峠に於て眺望を求め、登山と同じものを求めようとする心は、それ自身に於て矛盾してゐる。しかも此の矛盾を感じながらも、私達は何故に峠を求めるのであらうか。



雁坂峠（挿圖）
埼玉縣秩父郡栃本から山梨縣東山梨郡廣瀬に通ずる峠秩父三峠の一。

雁坂峠
（「峠と高原」による）

それは眺望の欲求を充すと共に、峠をこしらへるに至つた功利的觀念に附隨する多くのものが、宛ら複雜な人生を象徴するが如き、色々な興趣の材料をもつてゐるからである。そしてそれあるが

故に、或意味に於ては、峠は山以上の興味を與ふる。そこには自然自身の變化による峠の變化以外に、人間が偶然に見出した興味による變化が見出される。人間の欲望が表現される。歴史に對する尊敬が見出される。美を憧憬する精神が發揮される。宗教的感情が誘導される。時には人類愛が見出される。樣々の研究的對象が見出される。麓の人里との微妙な感情のつながりが見出される。

斯くして峠は最も人間的な感情・意志を表現するものとなり、一方には功利的意味に於ける大動脈であると共に、最も微妙な人間的感動をあらはす神經系統ともなつてゐる。そしてこの自然的に出來た峠が基本となつて、後には科學的な見地による改造が加へられる。しかし多くの場合、人間の多くの經驗より生ずるもの

が基礎となつて、如何に人類の經驗が科學的見地と結論に於て一致するものであるかを證明して吳れる。

斯くして極めて自然的に作られ、經驗的に辿られ來つた峠道は、最も複雜な人間的要素を豐富にもつてゐる。そして登山者に取つて最も價値ある要素をも、殆ど無意識に取入れてゐる。恐らくは峠には、最初にそれを作つた人々の感情が、或種の自然を欲し、或種の自然を厭ふ具體的な峠道となつてあらはれてゐたことであらう。そして、後にそれを辿つた人々の感情にして之と背馳しない限り、彼等は之を無條件に繼承することを厭はなかつた。そこに人間の個性があらはれ、又、普遍性があらはれる。峠を好む人に取つて、其の與ふるものは、眺望以外には、抽象的に云へば、そこにあらはれた個人性であり、普遍性であらう。其の意味に於て、藝術品

が個人により作られ、而も多くの人に味はれると同じ意味を峠はもつてゐる。

山に登る人には色々の動機がある。日本にあつては、各地方に於ける最高峰は、最も宗教的な禮拜の場所となり、或はそれ自身、神聖なものとなつてゐる。又、今日に於ては、山は登山の快感を味ふ場所となつてゐる。しかし何れにしても、是等の欲望は頂上に究極する點に於て一致してゐる。之に反して、峠を行く人の動機は、山のやうには單純ではない。今日少數の峠自身を味はんとする人を除いては、峠を行く人の動機は、恐らくは峠自身に究極してゐまい。峠から山を好きになる人があらう。又、山から峠が好きになつて行く人もあらう。しかし登山することゝ、峠を行くことゝは、初めから目的が異なつてゐた。峠に於ける宗教的意義は、後に

なつて道中の安全を希ふ精神により附加されたものであるに過ぎない。

つまり、私達が峠に最も興味を見出す所以は、以上の複雜なる人間的要素が自然と調和されて、融然として一つの分析することの出來ない統體を形作つてゐるところに存する。初めに功利的精神から生じた人間的要求が、峠に於て充されてゐると共に、それが最も美はしい自然と相俟つて不思議な働をすることに存する。從つて一方には、それは人間的事實を現實的世界から高揚すると共に、他方に於ては、餘りにも人生から超越的にならうとする山を、一歩人生に近づかしめる。從つて峠の一徑一木、悉く人間的趣致と自然との調和を語るものでなければならない。

峠を想ふ時、私は心と身との輕さを感ずる。そこには登山に於

夏目漱石
名は金之助。東京の人。文學者。大正五年歿、年五十。

けるほどの天候の心配もなければ、通路の異變を豫想する苦勞もない。永い歷史の背景が自分を支持して、私も人類の一員であることを自覺する。そして絶えず峠の彼方に自分を待つてゐる平和な宿があるといふ感じによつて亢奮せしめられる。道程が一日で十分であるといふ感じが私の心を安らかにし、凡てのものを十分にのんびり味ふ餘裕を與へて呉れる。しかし峠の頂上に立つて、雲が足下に迷ひ、前方に隱見する中腹の森林の黑々とした間に、やがて自分がはいることを考ふる時、一種の不安な而も安全な深いよろこびが心にむらがつて來ることを覺える。（峠と高原）

五　倫敦塔

夏目漱石

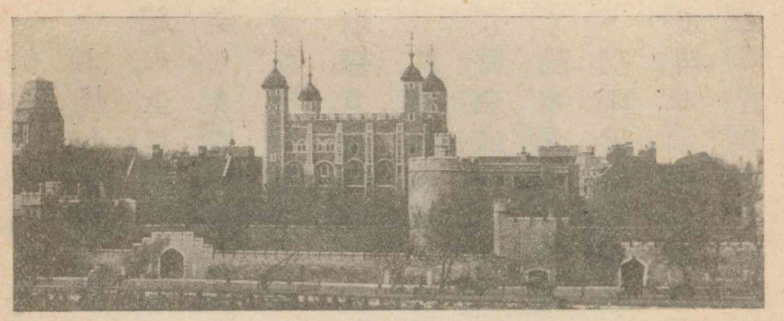
二年の留學中、只一度倫敦塔を見物したことがある。其の後再

び行かうと思つた日もあるが、止めにした。人から誘はれたこともあるが斷つた。一度で得た記憶を二度目に打壞すのは惜しい。三度目に拭ひ去るのは最も殘念だ。塔の見物は一度にかぎると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其の頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された樣な心持であつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此の響、此の群集の中に二年住んで居たら、吾が神經の纖維も、遂には鍋の中の布海苔の如く、べと〳〵になるだらうと、マクス、ノルダウの退化論を、今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

マクス、ノルダウ　獨逸の社會批評家。退化論の著がある。

來るに　「碧巖錄」中の語。



倫敦塔

「來るに來所なく去るに去所を知らず。」といふと禪語めくが、余はどの路を通つて塔に着いたか、又如何なる町を横ぎつて吾が家に歸つたか、未だに判然しない。どう考へてもおもひ出せぬ。たゞ塔を見物しただけは慥である。塔其の物の光景は、今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出來る。前はと問はれると困る。後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が、會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落ちると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焦點の樣だ。

（倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて、龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血・人の肉・人の罪が結晶して、馬車・汽車の中に取殘されたるは倫敦塔である。

テームス河　倫敦市を貫流する河。塔橋を架す。

此の倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てゝ眼の前に望んだ時、余は今の人か、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めといひながら、物靜かな日である。空は灰汁桶を搔き交ぜた樣な色をして、低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶かし込んだ樣に見ゆるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理矢理に動いて居るかと思はれる。帆掛船が一

隻、塔の下を行く。風なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白き翼が、何時までも同じ處に停つて居る樣である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて櫓を漕ぐ。これも殆ど動かない。塔橋の欄干のあたりには、白き影がちら〳〵する。大方鷗であらう。見渡した所、すべての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る。皆過去の感じである。さうして其の中に、冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つて居るのが、倫敦塔である。汽車も走れ、電車

塔　橋

九段　東京麹町區。遊就館は九段の靖國神社の境内にあつて古今の武器武具を陳列する。

セピヤ　Sepia, 黑褐色。

も走れ、苟も歴史の有らん限りは、我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其の偉大なるには今更の様に驚かされた。

此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの、角張りたるもの、色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、さうしてそれを蟲眼鏡で覗いたら、或は此の塔に似たものが出來上りはしまいかと考へた。

余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中に、ぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が我が心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を、吾が脳裏に描き出して來る。暫くすると、向ふ岸から長い手

憂の國に　伊太利の詩人ダンテの作「神曲」地獄篇中の句。

を出して、余を引張るかと怪しまれて來た。今まで佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手はなほ〳〵強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡りかけた。長い手はぐい〳〵牽く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで驅けつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮遊する此の小鐵屑を吸收して了つた。門を入つて振返つた時、

憂の國に行かんとする者は、此の門を潜れ。
永劫の苛責に遭はんとする者は、此の門を潜れ。
迷惑の人と伍せんとする者は、此の門を潜れ。
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初の愛は、我を作る。
我が前に物なし、只無窮あり。我は無窮に忍ぶ者なり。

此の門を過ぎんとする者は、一切の望みを捨てよ。

といふ句が、どこぞに刻んではないかと思つた。余は此の時既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと、向うに一つの塔がある。これは丸形の石造で、石油タンクの狀をなして、恰も巨人の門柱の如く、左右に屹立して居る。其の中間を連ねて居る建物の下を潛つて、向うへ拔ける。中塔とは此の事である。少し行くと、左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黑鐵の冑が、野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて、敵遠くより寄すると知れば、塔上の鐘を鳴らす。星黑き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆる時も、塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民が、君の政非なりとて、蟻の如く塔下に押寄せて犇めき騷ぐ時も、亦塔上の鐘

祖來る時（バニシテヘバニ逢レ佛殺レ佛、逢レ祖殺レ祖、於ニ生死岸ニ所ハ得ニ大自在ニ。（臨濟錄）

を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は、今いづこへ行つたものやら。余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと、右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は、皆舟から此の門まで護送されたのである。彼等が舟を捨てゝ一たび此の門を通過するや否や、娑婆の太陽は再び彼等を照さなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で、此の門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は

涙の涙に搖られて、此の洞窟の如く薄暗きアーチの下まで漕ぎつけられる。口を開けて鰯を吸ふ鯨の待ち構へて居る所まで來るや否や、きいと軋る音と共に、厚樫の扉は彼等と浮世の光とを長へに隔てる。彼等はかくして遂に宿命の鬼の餌食となる。明日食はれるか、明後日食はれるか、或は又十年の後に食はれるか、鬼より外に知るものはない。此の門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであつたらう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴る時、漕ぐ人の手の動く時毎に、吾が命を刻まれる樣に思つたであらう。（漱石全集）

宗鑑　山崎氏。連歌師。天文二十二年（一五二三）歿、年八十九。

六　春夏秋冬

手をついて歌申し上ぐる蛙かな　宗鑑

しをるゝは何かあんずの花の色　貞德

雪月花一度に見する卯木かな　宗因

世の中や蝶々とまれかくもあれ　宗因

白露や無分別なるおきどころ

落ちざまに水こぼしけり花椿　芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

荒海や佐渡に横たふ天の川

猪も共に吹かるゝ野分かな

旅人と我が名よばれん初しぐれ　其角

明月や疊の上に松のかげ　其角

黄菊白菊その外の名はなくもがな　嵐雪

貞德　松永氏。松永久秀の孫。花の本の號を賜ふ。承應二年（一六五三）歿、年八十三。

宗因　西山氏。熊本藩士。天和二年（一六八二）歿、年七十八。

芭蕉　松尾氏。伊賀の人。正風俳諧の祖。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

其角　榎本氏。芭蕉の高弟。寶永四年（一七〇七）歿、年五十六。

嵐雪　服部氏。芭蕉の高弟。寶永四年（一七〇七）歿、年五十四。

去來　向井氏。芭蕉の高弟。寶永元年(一七〇四)歿、年六十一。

太祇　炭氏。京都の人。明和八年(一七七一)歿、年六十。

蕪村　谷口氏。又與謝氏。天明派の巨匠。また畫を善くした。天明三年(一七八三)歿、年六十八。

五十嵐力　米澤の人。國文學者、文學博士、早稲田大學教授。

元日や家にゆづりの太刀佩かん　去來

長閑さに無沙汰の神社まはりけり　太祇

善根に灸すゑてやる彼岸かな

梅をちこち南すべく北すべく　蕪村

春の海ひねもすのたり〳〵哉

ほとゝぎす平安城をすぢかひに

四五人に月落ちかゝる踊かな

易水に葱ながるゝ寒さかな

七　謠曲の中心趣味

五十嵐力

室町時代は鎌倉時代と同じく武家の天下であり、その社會道德は武士道を本位とし、簡素を主とし、感情を抑へ、武事軍事に興味を持つて居つたので、大體鎌倉思想を受けついでゐるが、その特色は鎌倉思想と平安朝思想とを調和した所にある。この時代は鎌倉式を受繼いでゐるとはいふものゝ、世の定まるに及んで、段々鎌倉式の樸實に過ぎて雅致に乏しいのが慊らずなり、平安朝文藝の優美で彫琢を極めたのが懷かしくなつて來た。時宗を初め北條時代の名族が治世・修身・安心立命の要具として眞面目に懸命に歸依したとは違つて、足利時代には茶味・禪味などいうて、一種の身嗜みの道具、我が言行に寂び・床しみを添へる一種の光澤出し道具として、禪宗を取扱ふ傾を生じて來た。かくして此の時代は、一種の華美なる趣味を發揮して來たが、それは普通の華美、平安朝の華美ではなくして、鎌倉式の樸實のいぶしをかけた華美である。隨つて一

時宗　北條時宗。

圓覺寺　禪宗。北條時宗建立。
建長寺　禪宗。北條時頼建立。
金閣寺　足利義滿の別業を寺としたもの。禪宗。
銀閣寺　足利義政の山莊を寺としたもの。禪宗。
雪舟　畫僧。北宗畫雪舟流の祖。永正三年（一五〇六）歿、年八十七。
雪村　足利季世の畫僧。福島縣（磐城）三春の人。

面から見れば、やはり一種の樸實趣味であるが、鎌倉そのまゝの樸實ではなくして、平安朝の艶を帶びた樸實、底に華美の光輝を韜んだ樸實である。鎌倉の圓覺寺・建長寺を見て後に、京都の金閣寺・銀閣寺を見れば、此の趣味の違がわかると思ふ。茶器にも、雪舟・雪村の繪にも、能にも、謠曲にも、皆この室町趣味が溢れて居る。

華麗を簡樸で統べ、簡樸に華麗を含める――吾等は、此の反對した二要素の奇しき調和に、「さび」といふ不思議な美が成立つと思ひ、而してこれが此の時代の中心趣味であると思ふが、當時の文學中で此の趣味を最もよく現はしたものは、謠曲である。

當時の社會の中心は武士である。而して當時の武士は簡易なる生活に甘んじてゐた。茶の湯なども本來は簡易なる生活の標章であつたであらう。四疊半の小座敷に數人相會して狹しとせ

御伽草子　室町時代から德川初期までに婦人子供の讀物として作られた小說の概稱。
古今　古今和歌集。
萬葉　萬葉集。
伊勢　伊勢物語。
源氏　源氏物語。
狹衣　狹衣物語。狹衣大將を主人公とした小說。作者は大貳三位といふ說がある。
阿漕が浦　三重縣安濃郡と一志郡とに亘る海濱。

ず、木の葉で染めた麁服を纏ひ、簡單な御馳走に安んじて、光風霽月の心地を樂しむといふのは、あの時代でなくては發明されぬことである。彼等はかやうに簡易なる生活に安んじたが、それと共に文藝の方面に於て憧るゝ所は、前代の艶麗なる文學、及び漢土の立派なる文章であつた。此の時代の小說、御伽草子などには、田舍少女の身嗜みに古今・萬葉・伊勢・源氏・狹衣を讀破したなどいふことがあり、阿漕が浦の魚屋が源氏物語を說くなどいふことがある。當時相應の學者でさへ容易に讀めなかつた萬葉や源氏が、田舍少女や、魚屋や、普通の武士に讀めよう筈がない。これは畢竟嚙みこなせぬ古文學に對する時人の憧憬心を裏面から證明したものである。彼等はかやうに和漢の古文學を崇拜した。併しながら文學の衰へた世の中として、容易にこれを理解することすらも出來ぬ、ま

觀阿彌　結崎清次。觀世派猿樂師の祖。足利氏に從ひ大和結崎を領した。應永十三年(一四〇六)歿、年五十二。

世阿彌　結崎元清。清次の長子。足利義滿・義教に仕へた。能樂の大成者。康正元年(一四五一)歿、年八十一。

してこれに對抗すべき新作を出すなどは及びもつかぬことである。かくして彼等の力に叶ふことで彼等の理想に近い仕事は、古文學の名文句を集め、これに繼ぎはぎの意匠を施して纏めることであつた。此の骨折の結果として謠曲といふ繼ぎはぎ文學、綴錦文學が起つた。而して此のつゞれ文學を最も巧みに最も多く書いて、謠曲を大成した者は觀阿彌の子、當世第一の天才、結崎元清、卽ち世阿彌である。

「つぎはぎ」は、ひとり謠曲の特色なるのみならず、當時の文學の殆ど全體に通じた特色であつた。例へば御伽草子の如きは、思想・文章の兩面に通じ、適不適をば問はずして、唯美ならんことをのみこれ求めた。美なる事物、美なる文句の寄せ細工、これが當時の小說の理想であつたらしい。

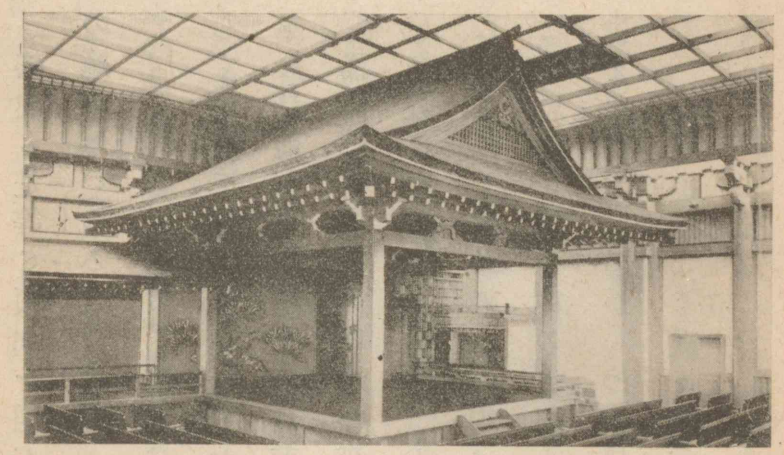
平家　平家物語。

朗詠集　和漢朗詠集。藤原公任が和歌と漢詩との朗詠を選んで並擧したもの。四卷。

白氏文集　唐の詩人白樂天の詩文集。

謠曲も是等と傾向を同じうして居つたが、是等ほどには不自然の嫌が無い、のみならず、往々古名句を駕御して獨自の美を發揮して居る場合もある。謠曲は集美補綴の方式を最も濃厚に最も激しく用ひて居りながら、しかも他の同臭味の文學に比すれば、長所を分け前して短所を分け前せぬ傾があつたやうに見える。

謠曲には源氏・伊勢・古今・平家・朗詠集・白氏文集・佛典などの名文句が無數に取入れてある。しかしながら、其等の美しい名句は、謠曲に於てはたゞ美しさを現はすのみならず、其の綴り合はされた間に、不思議にも一種の「さび」を現はして居る。華やかなる裡に苔の生えた、いぶしのかゝつた、曇つた、物しづかな、幽寂な、神祕な趣がある。この美麗なる數々の文句を、寂びたしづかな趣味で裏打して繫いで居る所、實に當時の武士が簡易に住して華麗に憧憬した心

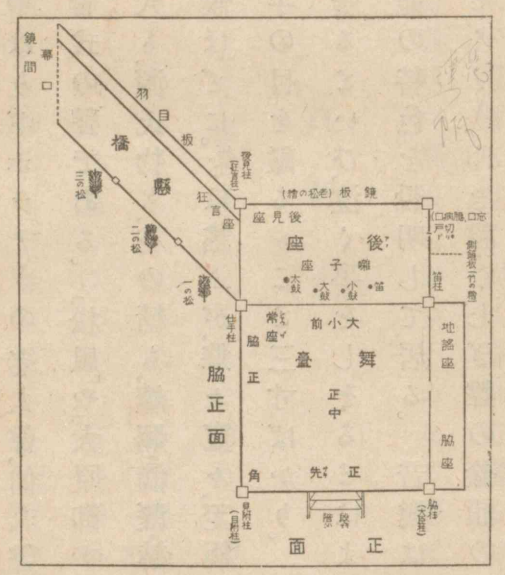


能舞臺

情とぴつたりと契合して居る所で、此の武士の心情との肉身的關係に、謠曲の特色・價値・生命が存するのである。

此の味ひは謠曲の實演さるゝ能を見れば、一層明かになる。能舞臺に入つてまづ目につくのは、正面の鏡板に畫かれた一本の老松、――千年の苔にさびて大地に据わり込んだやうな神々しき老松――あの老松は天地・山川・風水・月露・雨雪・雷電・花鳥・木石等のあらゆる自然現象、老若

男女・貴賤・貧富・平和・鬪爭・喜怒・哀樂等のあらゆる人事の背景として用ひられ、そのさびた靜かな風趣を以て善惡・美醜・莊嚴・滑稽、あらゆる所作を統べて居る。役者の謠ひぶり舞ひぶりは、例のさびた、落ちついた、底力のある聲や、曲や、所作を以て全體を一貫して居る。悲しい事も、嬉しい事も、賑やかな事も、淋しい事も、可笑しい事も、恐ろしい事も、若い者の事も、年寄の事も、男の事も、天女の事も、鬼神の事も、散歩も、駈足も、すべてさび色の同一色、曇つた、苔の生えた、底力のある聲で



能舞臺平面圖

あらはす。「春霞たなびきにけり、久方の、月の桂の花や咲く。」といふが如き賑やかなる文句をば、鶯の如き嬌音で謠ふかと思へば、何の、やはりドホラ〳〵の老人聲、仙人聲、肉食・火食とは緣の遠さうな木食式の聲である。「松風」や「大原御幸」の優婉な曲も、業平も、小町も、天人も、源氏物も、花の精も、燦爛・滴瀝・赫奕たる文句も、其の通り。「急ぎ候ほどに。」とは謠ふが、悠々寛々、至極太平なものである。泣くには手の目を離るゝこと三寸ばかり。能の術語に、悲しんで俯く樣を曇るといひ、泣く事をしをるとはよく云うたもので、いかにもよく能の特色を説明して居る。音樂はどいふと、大小鼓・笛のドン〳〵ピイ〳〵、叩き聲・ひしぎ聲の餘韻の無いもの。地謠はどいふと、シテ・ウキ・ツレの聲の甲高になり易いのを、曇つたドホラ聲で抑へ抑へ鎭め〳〵て行く。面はあの通りの澁い艶消しの神祕的の者で、

春霞「羽衣」の句。

源氏物　源氏物語に題材を取つたもの。

シテ　天人
ワキ　白龍
ワキツレ　漁夫

風早の　風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の浦人さわぐ浪立つらしも（萬葉集）

萬里の好山　千里好山雲乍斂。一樓明月雨初晴。（詩人玉屑）

忘れめや　忘れずよ清見が關の浪間よりかすみて見えし三保の松原（續古今集、中務卿親王）

しかも名人の能役者の顏は「面のやうになる」とさへ云うてある。華麗に憧憬して簡易に安住した武士の心持は、なんと此の中に毫末の遺憾もなく現はされて居るではあるまいか。殊に謠はるゝ詞章が絢爛の名句づくめなる事と對照して、一層面白い。

（新國文學史）

八　羽衣

ワキツレ一聲謠「風早の三保の浦わを漕ぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。ワキサシ謠「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ワキツレ謠「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げに長閑なる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつゞく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身の眺にも、心そらなる景色かな。歌「忘れめや、山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。

風向ふ、雲の浮浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。

風向ふ雲の浮浪立つと見て釣せぬ先に歸る舟人（冷泉爲相）

三保の松原

待てしばし春ならば、吹くものごけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝凪に、釣人多き小舟かな。

ワキ詞「われ、三保の松原にあがり、浦の景色をながむる所に、虚空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に美しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、其の衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ詞「こ

羽衣

風早の三保のうらわを漕ぐ船の浦人騒ぐ波路かな　これは三保の松原よ。白龍と申す漁夫にて候。萬里の海山よ雲霞ちよ起り。一樓の明月は雨始めて晴れ、げに長閑なる時しもや。春の氣色松原の。はるばるつゞく朝霞。月も殘りの天の原。及びなき身の眺めまでも。心そらなる氣色かな。忘れめや山路を。わけて清見潟。遥か三保の松原よ。立ちてゐいざや通ひんとまつゐいざや通ひんとまつゐ。風むかふ。雲の袖はたつと見て。釣せで人や歸らん。浪はたつと見て。釣せで人や歸らん。待てしばし春ならば吹くものごけき

羽衣の謠本

還らんことも叶ふまじ。

さりとては返したび給へ。

ワキ謠「此の御れは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。元の如くにおき給へ。

ワキ詞「そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。

シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に

——羽　衣（村上三千穂筆）——

詞を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、詞もとより此の身は心なき、天の羽衣取り隱し、謠「叶ふまじとて立ちのけば、シテ謠「今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。

ワキ謠「地にまた住めば下界なり。シテ謠「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ謠「白龍衣を返さねば、シテ謠「力及ばず、ワキ謠「せんかたも、地謠「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も、目の前に見えて、あさましや。

シテ謠「天の原、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謠「棲み馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましき景色かな。

歌「迦陵頻伽のなれ〳〵し、聲今更に僅かなる、雁が音の歸りゆく、天路をきけば懷かしや。千鳥鴫の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。

天の原云々
丹後風土記の歌。

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや。こなたへ賜はり候へ。ワキ詞「しばらく。承り及びたる天人の舞樂、只今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「嬉しや、さては天上に還らん事を得たり。此のよろこびにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。只今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとてはまづ返し給へ。ワキ詞「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで其の儘に、天にやあがり給ふべき。シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ謠「あらはづかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謠「天の羽衣風に和し、シテ謠「雨に濕ふ花の袖、ワキ詞「一曲をかなで、シテ謠「舞ふとかや。

次第地謠「東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたの天といつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空はかぎりも無ければとて、久かたの空とは名づけたり。

シテサシ謠「然るに、月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地謠「白衣、黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。

シテ謠「われも數ある天少女、地謠「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

クセ謠「春霞たなびきにけり久かたの、月の桂も花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風、雲の通ひ路吹き閉ぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春の色を三保が崎、月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も、松風も、長閑なる浦の有樣。其の上、天地は何を隔てん玉垣の、內外の神の御末に

二神　伊弉諾・伊弉册の二尊。

十方　東西南北乾坤巽艮上下。

春霞　春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらん（紀貫之）

天つ風云々　僧正遍昭の歌。五句「とどめん」

て、月もくもらぬ日の本や。

シテ謠「君が代は、天の羽衣まれにきて、地謠「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて數々の笙・笛・琴・箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は涙に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。

シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。

地謠「東遊の舞の曲、シテワキ謠「あるひは天つみ空の綠の衣、地謠「又は春立つ霞の衣、シテ「色香も妙なり少女の裳裾、地謠「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。

キリ地謠「東遊の數々に、其の名も月の色人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土に之を施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空のかすみにまぎれて失

君が代は　君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらん（拾遺集、讀人不知）

箜篌

あしたか山　愛鷹山。富士山の南麓にある。

せにけり。（觀世流謠曲）

九　金槐集を評す

齋藤茂吉

今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は來にけり

正月一日に詠んだ歌である。四角張つた形式的な歌になり易い處を、作者の息をふきかけて活かしてゐる。この歌の結句は「來にけり」と斷定して「來ぬらし」とか「來ぬらむ」とか云つてゐない。この場合の「けり」は感歎の助動詞であるが、感歎のうちに斷定の意がある。思ひ切つて大きく平氣で云つて居るのがよいのである。そしてゐて「今朝みれば山も霞みて」とちやんと急所はのがさない。換言すれば實際の感じを重んじて居る。實感に順じてゐる。讀

金槐集　源實朝の歌集。金槐和歌集の略。三卷。

齋藤茂吉　醫學博士。青山腦病院長。アララギ派の歌人。

者の側からいへば「天の原より春は來にけり」だけでは一寸困るのであるが「今朝見れば」云々といはれると、初めて感じに乘つて來る樣に思はれる。

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

これも有名な歌である。續後撰集には「箱根にまうづとて」とある。家集には「箱根の山を打ちいで見れば浪のよる小島あり、供のものに此の海の名を知るやと尋ねしかば、伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞きて。」といふ詞書がある。「伊豆の海や沖の」と、こゝは連續して息を切らずに讀む方がよい。「小島に波の寄る見ゆ」は、波が磯に寄せて、白く見える光景である。「寄る」といふ運動をあらはす詞は甚だ利いてゐる。さうして白い波といふ色彩が必然に

續後撰集　續後撰和歌集の略。二十卷。冷泉爲家が後深草院の勅を奉じて撰したもの。建長三年（一二五一）に成る。

纒はつてゐるのである。「伊豆の海や」と先づ廣く云つて、沖の小島に」と限局せしめたところなど、おのづからに行つて居る。この歌は矢張り金槐集中の佳作の一つである。賀茂眞淵は「かくまでは いかでよみたまふらむと常にめでらるめり。萬葉の『逢坂をうち出て見れば近江の海白ゆふ花に浪たちわたる』とあるをもてよみ給ひけむそれよりもまされり。」と賞して居る。いづれが優れて居るかは、別種の景色であるから、さう容易には云はれない。

逢坂をの歌　萬葉集卷十三雜歌。作者不詳。

○荒磯の波のよるを見てよめる

大海の磯もとゞろに寄する波われて碎けてさけて散るかも

謂はゆる敍景歌は、天然現象が作歌衝動に働き掛けるのであるが、天然現象の空間的開展竝びに時間的流動と、吾人の內的節奏が相共鳴し相抱化融合する時に、玆に詩は生れんとするのである。つまり、天然の無常相が吾等內心の象徵たる時に、玆に詩は生れるのである。強烈なる主觀はこの意味に於て作歌に大切である。予は實朝のこの歌を讀んで常々かう思ふのであつた。從來の修辭學者或は短歌批評家は、この歌を擬聲法の最も巧みな歌、寫生の最も巧みな歌と稱して居る。けれども單にそれだけでは、眞に天然の無常相に觀入したこの歌の如きを解明する事が出來ない。達者な腕前、練達した技巧、單にそれだけでは決してこの樣な歌は作れないのである。直ちに天然を學べといひ、親しめといひ、歸命せ

源實朝

よと云ひ、虚心なれと云ふのも、如上の事柄に關聯してゐるのではあるまいか。かくして始めて謂はゆる敍景歌に生命があり、かくして始めて天然の本質に接觸することが出來るのである。想化と云ひ純化と云ひ印象的といふのも、皆この態度に外ならぬのである。

この歌は自然現象が内包的に單純にさながらに表現され、それと同化し高潮に達した作者内心の動搖が、彷彿として表はれてゐる點に於て、偉大な力を有して居るのである。一首の調が初句から起つて段々强烈になつてゆき、終に「かも」で止めて居る。一首を通ずる事勿論であるが、この「かも」に於て作者内心の運動が表はれ終るのである。この場合如何なる言語を以ても、この「かも」に代用する事が出來ない。それが必然にして緊密であるからである。

今の進歩した歌壇に於ても、「かも」は死語なり用ひるべからずなどいふ淺薄な概見に住する者があるのだから堪らない。一本に第三句の「寄する波」は「寄る波の」となつて居る。いづれも善いが、「とどろに」から連續するのであるから、「寄する波」の方が自然である。「寄る波の」と言へば「とどろに」との聯關が不緊密になり、調子が弱く、弛緩する。「よする波」といへば第三句で切れるから悪いといふ論者があるが、實は第三句で切れないで連續句なので、「の」又は「が」「は」が省略されて居る我が國の一つの語法である。かゝる論者は、連續と切れるといふ事をよく研究して居ないのだ。「われ」よりも「くだけ」は强く、「さけ」はなほ强い。これは全く音の配列によるので、日本語を有效に適所に用ひるといふのはかゝる事をいふのであるが、此處は技巧の力といふよりも深い同化力に待たなければならぬ。

「て」といふ助辭が三つ續いて「かも」で止めたあたり、予は常に感歎して止まぬ處である。

建暦元年七月洪水漫天土民愁嘆せむことを
思ひて一人奉向本尊聊致祈念
時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ
たまへ

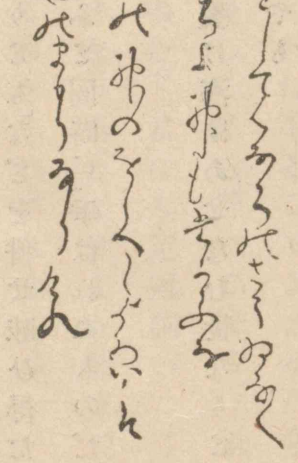
實朝は佛教の深い信仰者である。同情深い、やさしい人である。眞摯な人である。鎌倉幕府の征夷大將軍である。賴朝と政子の子である。この歌は、まことに如上の實朝の生んだ歌である。實朝は當時たゞひとり萬葉ぶりの歌を詠んだ。而して平氣で古句を踏襲した。然も佳作に至つては古今を獨歩してゐる。さうしてこの歌ほど眞摯深甚の氣の籠つてゐる力ある歌は金槐集にも

建暦元年
順德天皇の御代。
紀元一八七一年。

源實朝筆蹟
世の中はをしてはなちのさうゐなくおもふやすぢよ神もたがふな
鶴がをかの神のをしへしよろいこそ家のゆみやのまもりなりけれ

餘計はない。

この歌の第一句から第三句までは如何にも不器用に訥々として居る。彼はこの歌を作るに際して一心を籠めたのは言ふまでもない。祈念をこめて吟詠するなるが故に、訥々不器用となるのは自然である。さうして訥々の中に深甚の響のあるのも自然である。巧妙ではないが莊重にして大きい響のあるのはこれが爲である。この事は大切な事で、贔負目のためとかわざ〳〵佳い歌にしよう爲のこじつけなどいふ淺薄なものではない事を注意せねばならぬ。



源實朝筆蹟
（金槐集私鈔による）

四方の獸すらだにも「慈悲の心を」といふ題で實朝が詠んだ歌「ものいはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ」

太上天皇　後鳥羽上皇。

三首連作　他の二首は次の通りで歌集にはこの歌の前に掲げてある。

大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも人にいはめやも

ひむがしの國にわがをれば朝日さす波姑射の山のかげとなりにき

この歌は三句切の歌であるが、第三句の「なり」の處は作者のやさしい憐みの深い處があらはれて居る。作者が眞に感じて作るから、斯ういふ微細な處まで作者が現はれるのである。こんな事をいへば牽强の說といふかも知れぬが「四方の獸すらだにも」「海はあせなむ世なりとも」などを併せ味ひ得たならば、牽强の言でない事が分ると思ふと同時に、「爭はれぬものだ」との深い感に打たれるであらう。

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

「太上天皇御書下預時歌」といふ詞書がある、その三首連作中の最後の歌である。

「あせなむ」は乾涸せんの意である。「あせなむ世なりとも」のところで、ゆら〳〵と調が搖いで急進しないのは、感涙の滲み出でんとする刹那に似た、深い心の相を暗示してゐる。それを此處で調子が弛んだなどと評するのは、恐らくは淺はかな形式論者であらうと思はれる。一たんそこでよどんだ運動が、「君に二心わがあらめやも」とひた押しに押し行いて居る。予も確かにさう思ふが、此の歌は特殊の場合で、「君」にも定冠詞がつくのであるから力があるのである。或特殊の場合に、せまり極まつた作者の內生命から迸り出た歌である事を忘れてはならぬ。

予は嘗てこの連作を評した時、「莊嚴渾厚なる風調が當時動亂の背景を得て、讀む者の紅血をして逆流せしむる程の勢を有つてゐる。短歌のやうな小文藝中にこれだけの作のあるのは予の喜ぶところである。」と言つた。少しく褒め過ぎたかと思ふが、なほ考へ

て見ると新古今流の歌の教育を受けて來た實朝が、それを打破り、月雪花乃至幽玄の型から目醒め出でて、かういふ實地に觸れての作を自由に奔放に爲し遂げ、それが未だ三十歳にもならぬ人であつたかと思ふと、單にそれだけでも褒め過ぎては居ない氣がするのである。（金槐集私鈔）

新古今　新古今和歌集。二十卷。後鳥羽天皇が源通具・藤原定家・藤原家隆等に仰せて撰せしめ給ふたもの。元久二年成る。

太上天皇　後鳥羽上皇。延應元年（一二九九）崩、壽六十。

能因法師　俗名橘永愷。出家して攝津の古曾部に住む。古曾部入道ともいふ。後鳥羽天皇の頃の人。

一〇　秋の夕ぐれ

ほの〴〵と春こそ空に來にけらし　　太上天皇
天の香具山かすみたなびく

山里の春のゆふぐれきてみれば　　能因法師
入相のかねに花ぞ散りける

源頼政　世に源三位頼政といふ。治承四年（一一八〇）歿、年七十三。

藤原實定　後德大寺左大臣といふ。建久二年（一一九一）歿、年五十一。

寂蓮法師　俗名藤原定長。俊成の甥。建仁二年（一二〇二）歿。

藤原俊成　後白河天皇の朝に千載集を撰した。元久元年（一二〇四）歿、年九十一。

庭の面はまだかはかぬに夕立の　　源頼政
そらさりげなく澄める月かな

なごの海の霞のまより眺むれば　　藤原實定
入日をあらふ沖つしら波

和歌の浦を松の葉ごしに眺むれば　　寂蓮法師
こずゑによするあまのつり舟

駒とめてなほ水かはん山吹の　　藤原俊成
花のつゆそふ井出の玉川

後京極良經
藤原氏。攝政太政大臣。建永元年（一八六〇）歿、年三十八。

藤原家隆
新古今集の撰者。嘉禎三年（一八九七）歿、年八十。

藤原秀能
承久の亂に大將軍に任じ後出家した。仁治元年（一九〇〇）歿、年五十七。

藤原定家
俊成の子。新古今の撰者。仁治二年（一九〇一）歿、年八十。

さゝの葉は深山もさやにうちそよぎ
　こほれる霜を吹くあらしかな　　後京極良經

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より
　こほりて出づるありあけの月　　藤原家隆

夕月夜しほみちくらし難波江の
　あしの若葉をこゆるしら波　　藤原秀能

見渡せば花も紅葉もなかりけり
　浦のとまやの秋のゆふぐれ　　藤原定家

（新古今和歌集）

石原正明
尾張の人。國學者。文政四年（一八二一）歿、年六十二。

中澤臨川
名は重雄。長野縣の人。工學士。文學者。大正九年歿、年四十三。

○　新古今集のころの歌は、一首の口調をめでたくとゝのふることを本意として、詞のうへに心をのこして餘韻を深くこめ、一首のつゞけざま幽玄にして、あらはに淺まなる所なく、なさけを深うし、語勢をいたはり、たけ高くも、しめやかにも、つよくも、やはらかにも、百般の姿あり。たゞ、しを〳〵くたく〳〵とするを嫌ひて、詩人のいはゆる雄偉・流暢・豪壯・新奇といふしらべを常にはおもひためり。（石原正明）

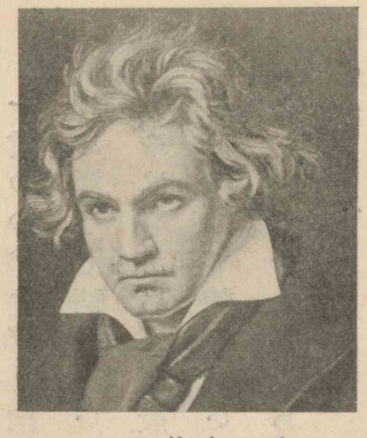
一一　ベートーヴェンの一生

中澤臨川

或時不幸な彼の爲に、神の助を祈つた友人の好意に答へて、ベートーヴェンは斯う言つた。「人よ、汝自ら助けよ。」

「悲しみを經ての喜び」――これが彼の一生の格言であつた。

ルドウィッヒ、フォン、ベートーヴェンの一生は決して野心家を滿足させるやうな教訓をも逸話をも與へない。それは苦しめる者のために、眞に苦しみ得る力のある者のために、「聖なる悲しみの甘露」を惠む。



ベートーヴェン

記憶せよ、(特に若き人々のために言ふ)、この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは偉大を希ふ者のためには、常に孤獨と寂寥に追はるゝ山徑である。最も強い者ですら、ある時は悲哀と失望から、おのづと頭がうなだれる場合がある。

記憶せよ、かやうな危險な場合に眞の偉人が汝を助けに來る。

ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戰に倦み疲れた時、彼のやうな信念と意志の海に暫く身を浴することの、どれだけ我等のために强味であるかよ。偉人の身邊には言ふべからざる勇氣の感染力がある。

我等をして運と偶然とによつて物質界に成功した著名な人達を忘れしめよ。たゞ心の偉大であつた者だけがヒーローの名に値ひする。人格が何時も人間の偉大さを計る尺度である。我等をして成功を說かしめるな。要は偉大であることにあつて、偉大に見えることではない。

偉人の生涯は長き犧牲に外ならない。悲慘な運命が、彼等の肉と靈との苦しみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝夕、苦痛と試鍊のパンを食べた。

ボン　獨逸西部の都會。ライン河畔にある。

オーケストラ　Orchestra. 管絃合奏團。

何のために彼等はそれだけ苦しんだのであらう。後の世のより強き仲間を助けるために、彼等に力と惠みを與へるために。

ベートーヴェンは一七七〇年獨逸のボンに生れた。彼の祖父も、父も、その土地の王室附の賤しい音樂師であつた。彼の母は矢張貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖のために一生を一つの樂しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時から、もう音樂を習はせられた。そして殘酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳からは或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

十八歳の時、彼は眞實賴りとしたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなんだ。彼

ウインナ　オーストリヤの首都。

ライン河　獨逸の西境を流れる河。

の父は酒のために全く仕方のない者になり了せてゐたので、その受ける養老金さへ直接子供の手へ渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦しい經驗は一生消しがたい深い印象を若き音樂家の胸に與へた。

一七九二年、ベートーヴェンはウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢の釀された靜かなライン河の岸邊を見棄てることの、如何に惜しまれたであらう。「わが故郷。そこは私が初めて日の光を見たところ。今も昔の如く美しいところ。」と言つて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から、彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は自分の手帳にかう書きつけた。「勇氣！私の身體の虛弱にも拘らず、私の天才は前途に輝くであらう。……二十五歳！その年齢に今

私は達した。……此の年齢は人間が彼の全部を發揮せねばならぬ時だ。」彼はまたかう言つた。「私の藝術は貧しき者を救ふより外の目的に捧げられてはならぬ。」

「丁度また同じ頃から、最大の不幸が彼の身體に一生の宿をとつた。彼は聾になり初めた。音樂家がその耳を失ふといふほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へざる苦痛を忍んで幾年かの間、それを隱してゐた。しかし、愈、回復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以て、之を友達に打明けなければならなんだ。「親愛なる友よ、お前のベートーヴェンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分なる聽感が、今私を捨てつゝある。……すべて私の感ずるもの、私に親愛なあらゆるものを捨てゝまで、このみじめな强慾な世の中に生き永らへなければならない私の一生は、どんなに悲

ブルターク　ギリシヤの歴史家。倫理學者。（西暦五〇―一二〇頃）

テレゼ、フォン、ブランスウヰック　ベートーヴェンの友人フランツ伯爵の妹。

慘であらう。」「しば〳〵私はこの身を詛つた。……私は、プルタークから忍從の德を敎はつた。能ふことなら、私の運命が私のために具へたものを堪へ忍ばうとおもふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つく〴〵考へ込むことがある。……忍從よ。悲しい隱れた場所よ、たつた一つの私の隱れ場所よ。」

一八〇六年、彼はテレゼ、フォン、ブランスウヰック女史と婚約した。然るに、この平和もまた永くは續かなんだ。彼等は互に相愛しながらも自然に遠ざかつて了つた。

それからはずつと孤獨の生活が續いた。しかもそれは洗ふやうな赤貧と不遇の生活であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ。」と彼は言つてゐた。ある

有名な曲を出した時などは、僅か七册しか賣れなかつた。

愛も野心も去つたあと、彼に殘されたものは、たゞ力のみであつた。その力の喜びと、之を表現する必要とが彼を占領した。一八一二年に、彼を見た一人は、「いかなる皇帝も曾て彼の如く自分の力を意識しなかつた。」と言つてゐる。

當時の或者は彼の曲を指して、醉漢の音樂だと言つた。然うだ、確かに醉漢の音樂だ。然し「俺は人類のために喜びの御酒の口を開けてやるバカスだ。おれは精神の聖狂を人間に與へる者だ。」といつた醉漢だ。

彼はナポレオンを見て斯う言つた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに、戰術の心得があれば、彼に教へてやるものを。」と。彼の容貌はナポレオンに能く似てゐた。殊にその意志を現はす締つた

バカス　ギリシヤ神話の酒の神。

ナポレオン　ナポレオン一世を指す。

口元が。

この「未來の人道」を目的として一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として往生を遂げた。

彼は息を引きとる前に自分の一生を顧みて斯う言つた。「喜劇の終りだ。」と。その日は殊に嵐が劇しかつた。二月の寒い空には雪ふゞきがして。

「悲しみを經ての喜び。」彼ぐらゐ聖い喜びに憧れた者はなかつた。悲慘な生活のどん底から、彼は未來の人類のために「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗したあとで、とう〳〵最も晩年にその希望を實現した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

曲の中途にオーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神祕

リヤ王　セークスピア作の悲劇。リヤ王はその主人公。

オーステルリッツ　當時のオーストリヤハンガリーにある。西暦一八〇五年ナポレオンは露墺聯合軍を此地に破つた。

な沈默がやゝしばし續く。そして「喜悅」の神が、優しい靜かな歩みを以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがては狂熱の形に變る。そして嵐の中のリヤ王のやうな暴狂に移つたあとで、それがまた靜かな宗教的法悅の境に入り、最後は聖愛の無我鄕で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶ事が出來るか。オーステルリッツの戰勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。

偉大な生の熱愛者よ。汝の口からは常に喜悅の聲が洩れた――

――不幸が汝の命を奪はうとしたその日でさへ、「おゝかくも美しい人生よ。」と。又「私は千たびくりかへして私の生を住みたいと思ふ。」と。

苦しむ者よ、苦しむ力ある者よ。汝の爲には、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲慘の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が後世に苦しむ者のために助となることを望んだ。そしてかう言つた。「憐むべき忍苦者は、己と同じやうな一人の人間――あらゆる自然の障碍にも拘らず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間を、こゝに見出して、慰安を感ずるであらう。」と。（臨川全集）

近松門左衛門　本名は杉森信盛。巢林子と號した。劇曲作家。享保九年（一七二四）歿、年七十二。

親子　鄭芝龍及びその子鄭成功。ともに明の忠臣。

李蹈天　明朝に仕へて右軍の將となり、後、韃靼に內應して明帝を弑した。

一二　和藤內

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地にぞ着きにける。鄭芝龍一官は、故鄕へ歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「わが本國といひながら、時移り代變り、天下悉く李蹈天が引入れに

て、韃靼夷の奴となり、昔の朋友・一族とて誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死のありかも知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城にたて籠るべき處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立退き、日本へ渡る時、二歳なりし娘の子を乳母が袖に捨ておきしが、その子が母は產み落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の惠に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となる由、商人の便りに聞き及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、打連れては人

吳三桂　明朝の忠臣。司馬大將軍に任じた。
天啓五年　明の熹宗の年號。我が後水尾帝の寛永二年。
娘　錦祥女。
甘輝　明の將軍。後、韃靼に降つたが幾ならずして復之に叛き、鄭芝龍に應じた。

近松門左衞門

も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤內は母を具し日本の漁船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追ひ附くべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。是猛々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ち揃へ、萬事を示し合すべし。」と、方角とてもしら雲の日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ和藤內、人家を求め忍ばんと、かひ〳〵しく母を負ひ、たつきも知らぬ岩・巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越えはね越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤內ほうと我をぬかし、「のう母ぢや人、この脚骨に覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行

和藤內　鄭成功。國姓爺と稱する。母は長崎縣松浦郡平戸村の漁夫の女。
潯陽江　支那江西省にある。鄱陽湖の長江に注ぐ所。
赤壁　湖北省武昌縣。
東坡　宋の蘇軾。その作る所の詩が忌諱に觸れ黄州に貶せられた。

けば行く程藪の中。むう、分つたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹・大竹押分け踏分け、尙奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓・攻太鼓・喇叭・ちやるめら、高音をそらし、ひよう〳〵とこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取卷く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と、茫然たるその折節、空凄じく風起り、沙を穿ち、ごうごうごう竹葉さつと卷き立て〳〵、吹き折る竹は劒の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤內ちつとも臆せず、「讀めたり〳〵。さては異國の虎狩な。あの鐘・太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原。虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の德に因つて自然と逃れし惡虎の難、その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇

虎嘯けば
虎嘯谷風起。龍興景雲浮。（古樂府）

二十四孝
大舜・漢文帝・曾參等支那歷代の孝子二十四人。楊香は其の一人。晉の人、赤手虎を搏つて父の厄を救つた。

力、唐へ渡つて力始め、神力します日本力、刀で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひつからげ身繕ひ、母をかこうて立つたるは西天の獅子王も畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず、吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に頰を摩り附け〳〵、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけ唖み懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、捩つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘り移り、上になり、下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤內も大童、虎も半分毛を毟られ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、鞴吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、「やあ〳〵和藤內、神國に生れて神より受けし身體髮膚、畜類に出合ひ力立して怪我するな。日本の地は離る

身體髮膚
身體髮膚受ニ之父母一、不ニ敢毀傷一、孝之始也。（孝經）

天の斑駒
素盞男尊が天の斑駒を捕へ其皮を剝ぎ給うた故事。

和藤内と其の母

るとも、神はわが身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。」と、肌の護符を渡さるれば、「げに尤。」とおし戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、たけりに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じり〳〵と四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る。

をづゝを攫んで跳ね返し、打伏せ〳〵、ひるむところを乘つかゝり、足下にしつかとふまへしは天の斑駒、素盞男尊の神力、天照す神の威德ぞ有難き。

かゝる所に勢子の者群り來るその

中に、大將と覺しき者大音あげ、「やあ〳〵、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ獻上のため狩出したる虎なるぞ。早々渡せ、異議に及ばば打殺さん。しやくわん、しやくわん。」とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と賴む李蹈天とやら石花菜とやら茲へ突出し詫言させい、ぢきに逢うて用もある。さもない內はいかなこと、ならぬ〳〵。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ討取れ。」と一度に劍をばらりと拔く。

「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繫ぎし如くに働かず。「おゝ心易し。」と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割りたて〳〵、撫でまくる。

仁王
密迹金剛（左）・那羅延金剛（右）。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加はつて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛り唸りて飛び蒐る。「こはかなはじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劍・かり鉾・數鎗、手にあたるを幸ひに、投附け〳〵打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つくはへ〳〵、岩に打當て微塵になす。刃の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども色めき立つて逃げまどふ。後より和藤內「ごつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を摑んで差上げ、くる〳〵と振り廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。

此の勢に官人ばら、後へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤內、仁王立に突つ立つたり。「あゝ、申し御堪忍、御免々々。」と手を合せ、土に喰

先帝
宗烈皇帝。

ひつき泣きゐたり。

和藤內虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が忰、九州平戸に生長せし和藤內とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故鄕へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「喃、何の否で御座りましよ。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情賴み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。「おゝ、出來した〳〵。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手手に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そる

やらこぼつやら、絲鬢・厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、「噓々、村雨々々。」と涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衞門・何兵衞・太郎・次郎・十郎迄、面々が國所頭字に名乗り、二行に立ててぼつたてろ。」「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衞門・柬蒲塞右衞門・呂宋兵衞・東京兵衞・暹羅太郎・占城次郎ちやるなん四郎・ほるなん五郎・うんすん六郎・すん吉九郎・もうる左衞門・ぢやが太郎兵衞・さんとめ八郎・英吉利兵衞、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る、ほまれは異國・本朝に踏み跨げたる鞍鐙、虎の背中にうち乘つて、威勢を千里にあらはせり。（國姓爺合戰）

佐々政一　京都の人。文學博士。醒雪と號す。大正六年歿、年四十六。

徒然草　兼好法師を主人公とした淨瑠璃。延寶九年（一六八一）の作。

延寶五年　紀元二三三七年。

都萬太夫座　京都にあつた劇場。

一三　近松門左衞門

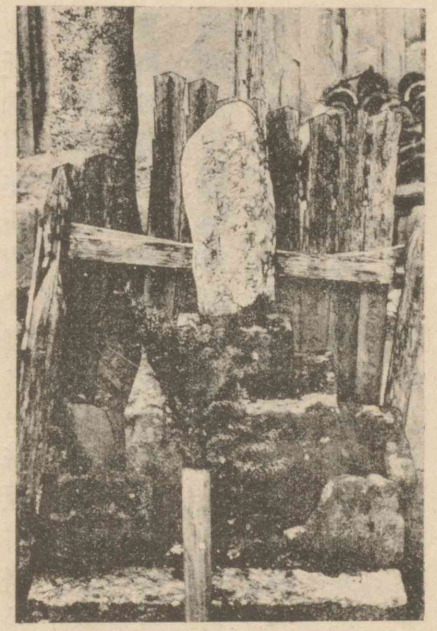
佐々政一

近松門左衞門は實名を杉森信盛といつて、武門の出である。その生國に就いては異說が多く、或は長州萩の藩士といひ、或は京都の生れといふ說もあつて、今なほ疑問である。ともあれ、その淨瑠璃の處女作「徒然草」などから推すと、作物に筆を染め初めたころには、兼好の徒然草や謠曲位に通じてゐた當代の俳人戲作者並の學識を有してゐたに過ぎないのであつたらう。蓋し、その學殖も識見も年とともに漸く進步したのである。

延寶五年、彼が二十五歲の時に、都萬太夫座の爲に作つた脚本は、藤壺の怨靈の仕組で、藤の花が大蛇に變ずるといふのであつたといふことであるから、なほ恐らくは幼稚な舊式なものであつたと

貞享二年
紀元二三四五年。
義太夫
竹本筑後掾。攝津の人。淨瑠璃の一派義太夫節の祖。正德四年（一七一四）歿、年七十四。
世繼曾我
天和三年（一六八三）作。

思はれる。貞享二年、三十三歳の時、初めて竹本義太夫に舊作「世繼曾我」を演ぜしめて、翌三年に「出世景淸」を新に義太夫の爲に起草した。その頃から、殆ど在來のお伽草子風なる古淨瑠璃の面影を蟬脫し得たのであるから、普通には「出世景淸」以後のものを新淨瑠璃と稱することになつてゐる。



近松門左衞門の墓
（攝州河邊郡久々曙村廣濟寺）

爾來、義太夫及びその門下の爲に起稿したもの百餘曲に及んで、近松の名は都鄙に喧傳せられた。初期の作は皆時代物であつたが、後には世話物にも筆を染めた。しかし、どこまでも近松自身は時代物の方に多く苦心したもので、世話物は場當りの急作が多かつた。之を興行する場合にも、時代物は單獨に演ぜられたが、世話物は必ず時代物の次に、宛も歌舞伎の二番目狂言の樣に演ぜられたものである。從つて、當時最も觀客に喝采せられたのは時代物であつた。

時代物に於ける大體の筋は、いつも至善の人物と極惡人とが鬪つてゐて、幾多の紛爭の後に、善人の勝利に歸するのである。その善人の甚しく苦しめられる時には、往々不自然な超人間的の勢力が出顯して善人を救ふ。だが、それとても、後世の淨瑠璃や脚本に、種々の不自然な變化を弄して、見物の好奇心を惹かうとしてゐるのとは、頗る趣が異つてゐて、見物人が忠臣孝子の苦惱を見るに忍びないで、なし得べくば、自ら舞臺に躍り出でてもこれを救ひたい

といふ程に焦らせておいて、而して後、神怪不思議な事件を點出してこれを救ふのであるから、幼稚な見物はほつと息を吐いて安心する。その自然と不自然とを思ふに遑がないといふのが、近松の大に歡迎せられた所以であらう。かく、近松は見物の滿足を買ふ爲には甚しき不自然をも敢てする位であるから、時代物には殆ど悲劇といふべきものがない。甚しきは史實を曲げてまでも主人公を救つたのである。

世話物には當代の世相がさながら顯れてゐる。蓋し、見物本位である近松は、當時の幼稚な見物人は、古の英雄豪傑などといふものは、宛も鬼神の如きものと想像してゐるといふことを知つて、超人間の人物を時代物に描き出したが、世話物中に出づべき人物卽ち見物人が日常交際してゐる張三李四の輩には、極惡人も至善人

もなく、皆境遇に依つて支配せられる憐むべき人物であるといふことを、見物もよく認識してゐるから、近松も亦常に執着や過失の多い憐むべき、か弱き人間としてそれを描き出した。そこで、世話物には人間らしい人物が多いのである。時代物には絶對の善と惡とが鬪つたが、世話物の世界には絶對の善人も惡人もない。唯その主人公は抑へ難い感情に驅られて、知らず識らず社會の常軌の外に逸出する時に、社會の人と戰はねばならぬ。こゝに所謂世間の義理と人情との葛藤が起る。これは又實に當代の實相であつて、近松が如何に其の悲劇を避けようとしても曲げることが出來なかつたのである。

最後に一言すべきは、近松の文章の巧緻な點である。その綿密な緣語や掛詞の連續は必ずしも驚歎すべきではなからうが、その

道行の文句に叙景と抒情との巧に綯ひまぜられてゐる所などは、確かに天下の逸品である。殊に最も感ずべきは、事件の發展に伴ふ文段の推移の巧なことで、世話物では大抵主要なる人物が登場すると共に、簡單な會話や地の文で、それより以前の頗る複雜な事件の大體が說明せられる。それより以後は、事件の發展と共に益、人々の關係や境遇が明白になつて來て、見物人の爲に故らに說明したやうな所が少しもない。その妙所は一々擧げることも出來ぬが、恐らく日本文學の誇とするに足るものであらう。

（近世國文學史）

才覺の軸すだれ

原本の目次にはこの題目に「親の目にはかしこし江戸廻しの油樽」の句が副へてある。

井原西鶴

俳諧師。小說家。近松門左衞門・松尾芭蕉と共に元祿時代の三文豪と稱される。元祿六年（一六九三）歿、年五十二。

一四　才覺の軸すだれ

井原西鶴

宵の年の切なき事を忘れ難く、來年からは三ヶ日過ぎたらば、四日より商賣に油斷せず、萬事を當座拂ひにして、錢のない時は肴も買はぬがよし、諸事を五節供切りと胸算用を極め、借錢乞の怖い心を、直に正月になりける。今年は今までの嘉例を祝ひかへるとて、十日の帳綴を二日に取越し、五日にせし棚下しを三日にして、俄かに身の取廻し賢く、兎角宿を出るからに、思ひよらぬ銀をも使ひ、物見物參りに誘はれ、大事の日を空しう暮す事、無分別と思ひ定めて、商賣の事より外には人と物をも言はず、每日心算用して、諸事につけて利を得る事の少き世なれば、內證に物のいらざる思案第一と心得て、三月の出替りより食焚を置かず、女房に前垂させて、我も晝は旦那といはれて見世にゐて、夜は門の戶をしめ置きて、丁稚が踏碓を

あふち貧乏
扇ぎ立てるやうに貧乏がまとひつく。（當時の諺と見える。）

一升入る柄杓
一升入る柄杓へは一升。（諺）

龍松院
奈良東大寺龍松院の公慶上人。貞享二年（一六八五）勅許を得て大佛殿復興の爲に諸國を勸進した。

釋迦も錢程光らせ
釋迦も錢程光る。（諺）

助けてとらせ、足も大方は汲みたての水で洗ふ程に、氣をつけけれども、これかや「あふち貧乏」といふなるべし。又それ程に商事なくて、いよ〳〵日向に氷の如し。何としても「一升入る柄杓へは、一升よりは入らず。」と、昔の人の申し傳へし。されば熊野比丘尼が、身の一大事の地獄極樂の繪圖を拜ませ、又は息の根の續く程、流行唄をうたひ、勸進をすれども、腰にさしたる一升柄杓に、一盃は貰ひかねける。

さる程に同じ後世にも、諸人の志大きに違ひある事かな。冬年南都大佛建立の爲として、龍松院立出で給ひ、勸進修行に廻らせられ、信心なき人は勸め給はず、無言にて廻り給ひ、我が志あるばかりを請け給ふも、一升柄杓なるに、一歩に一貫、十歩に十貫、或は金銀を投入れ、釋迦も錢程光らせ給ふ、今佛法の畫ぞかし。これは格別の寄

八宗
倶舍・成實・律・法相・三論・天台・華嚴・眞言。

長者の萬貫貧者の一文
長者の萬燈貧者の一燈。（諺）

進として、八宗共に奉加の志、殊勝さ限りなかりき。既に町はづれの小家勝ちなる所までも、長者の萬貫貧者の一文、これも積れば一本十二貫の丸柱ともなる事ぞかし。これ思ふに、世はそれ〴〵に氣をつけて、少しの事にても貯へをすべし。分限になりける者はその性質格別なり。

或人の息子、九歳より十二の年の暮まで、手習に遣はしけるに、その間の筆の軸を集め、その外人の捨てたるをも取りためて、程なく十三の春、我が手細工にして軸簾を拵へ、一つを一匁五分づつの、三つまで賣拂ひ、始めて銀四匁五分儲けし事、我が子ながら只者にあらずと、親の身にしては嬉しさのあまりに、手習の師匠に語りければ、師の坊此の事をよしとは譽め給はず。「われ此の年まで數百人子供を預りて、指南致して見及びしに、其方の一子の如く、氣の働き

過ぎたる子供の、末に分限に世を暮したる例なし。又乞食する程の身代にもならぬもの、中分より下の渡世をするものなり。かゝる事には樣々の子細ある事なり。其方の子ばかりを賢き樣に思召すな、それよりは手廻しの賢き子供あり。我が當番の日はいふに及ばず、人の番の日も箒とり〳〵座敷掃きて、數多の子供が毎日使ひて捨てたる反古の丸めたるを、一枚々々皺伸して、日毎に屏風屋へ賣りて歸るもあり。これは筆の軸を簾の思ひつきよりは、當分の用に立つ事ながら、是もよろしからず。又或子は紙の餘慶持ち來りて、紙使ひ過して不自由なる子供に、一日一倍增しの利にてこれを貸し、年中に積りての德何程といふ限りなし。是等は皆それ〴〵の親の、世智賢き氣を見習ひ、自然と出るおのれ〳〵が智慧には非ず。其の中にも一人の子は、父母の朝夕仰せられしは、外の

事なく手習を精に入れよ、成人しての其身の爲めになる事との言葉、反古にはなし難しと、明暮讀み書きに油斷なく、後には兄弟子どもに勝れて能書になりぬ。この心からは行く末分限になる所見えたり。其子細は一筋に家業稼ぐ故なり。惣じて親より仕つゞきたる家職の外に、商賣を變へて仕つゞきたるは稀なり。手習子供も、おのれが役目の手を書く事は外になし、若年の時よりすゝどく無用の欲心なり。それ故第一の手は書かざる事の淺まし。其の子なれども、さやうの心入れ、よき事とはいひ難し。兎角少年の時は、花をむしり紙鳶を上し、智慧づく時に身を持ち固めたるこそ道の常なれ。七十になるものゝ申せし事、行く末を見給へ。といひ置かれし。

師の坊の言葉に違はず、此の者ども、我が世を渡る時節になつて、

様々に稼ぐ程成り下りて、軸簾せしものは、冬日和の道の爲に、草履の裏に木を付けて履く事仕出しけれども、これも續きて世に流行らず。又紙屑集めし者は、ちやん塗の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり。又手習ばかりに精を入れたるものは、物ごと疎く見えけるが、自然と大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中にも氷らぬ事を分別仕出し、樽に胡椒一粒づつ入るゝ事にて、大分利を得て年をとりけるに、同じ思ひつきにて油土器と油樽と、人の智慧ほど違うたるものはなかりし。（世間胸算用）

北原白秋
名は隆吉。福岡縣の人。詩人。歌人。

一五　建國の歌

北原白秋

一

そのかみ、天地闢けし初、
げに萌えあがる葦芽なして、
立たしし神こそ、
國之常立。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
かの若々し神の業を。

二

惟ふに日靈の大御神の、
げに言よさし給へる御詔、
知らせよ、皇孫、
三つの寶と。
いざ、

いざ仰げ、起ち復り、
豐葦原の中つ國を。

三

神武の御代こそ荒ぶる和し、
げに現神、宮太敷きて、
初めて築かせし、
國の礎。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
神ながらなる崇き道を。

四

爾にぞ明治の大き帝、

げに晴れわたる青高空と、
更にし照らさす、
四方に八隅に。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
わが彌榮の日の出る國を。

五

依り合ふ天地極み知らず、
げに天皇の御稜威盡きず、
誇れよ、國民、
われら榮あり。
いざ、

いざ仰げ、起ち復り、
たゞひとむきの日本魂を。

（青年日本の歌）

一六　玉勝間

本居宣長

一　あらたなる說を出す事

近き世、學問の道ひらけて、大方よろづのことりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とりぐにあらたなる說を出す人おほく、其の說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者いまだよくもとゝのはぬほどより、我おとらじと世にことなるめづらしき說を出して、人の耳を驚かすこと、今の世のならひなり。其の中にはずゐぶんによろしきことも稀には出でくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、たゞ人に優らん

勝たんの心にて、輕々しくまへしりへをも考へあはさず、思ひよれるまゝに打出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじき僻事のみなり。すべて新なる說を出すはいと大事なり。幾たびもかへさひ思ひて、よく確かなるよりどころを捉へ、いづくまでもゆきとほりて、違ふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、程へて後に、今一たびよく思へば、猶わろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

本居宣長

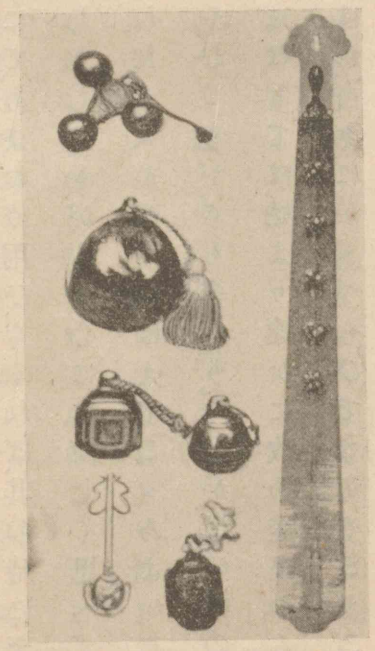
二　新に言ひ出でたる說

大かたよのつねに異なる新しき說をおこすときには、よきあし

きをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者ににくまれそしらるゝものなり。あるは己がもとよりより來つる説と、いたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるに棄ててとりあげざる者もあり。あるは心の中には、げにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことに從はんことのねたくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬ顔して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、其の中の疵をあながちにもとめ出でて、すべてをいひけたんとかまふる者もあり。大かた古き説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに二つ三つのとるべき所のあるをとりたてて、力のかぎりたすけ用ひんとし、新しきは十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つ

のよきことをもおしけちて、力のかぎりは我も用ひず、人にも用ひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。然れども又まれまれには、新なる説のよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、速かに改め從ふたぐひもなきにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、新なるよき説をきゝては、か

宣長遺愛の鈴



鈴の屋とは、三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれて、柱などにかけおきて、物むづかしきをり〳〵引きならして、それが音をきけば、心地もすがすがしくおもほゆ。その鈴の歌は、床のべに我がかけていにしへしぬぶ鈴が音のさや〳〵。かくてこの屋の名にもおほせつかし。（鈴屋集）

くてこそはといみじく喜びつゝ、忽ちに從ふたぐひもありかし。大かた新なる說は、いかによくても、速かには用ふる人まれなるものなれど、よきは年をへても、おのづからつひには世の人の從ふものにて、あまねく用ひらるれば、其の時に至りては、はじめにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせに從はんも猶ねたく、人わろくおぼえて、こゝろよからずながら、古きをまもりてやむともがらも多かり。しか世の中の論定まりて、皆人の從ふ世になりては、始より遠かに改め從ひつる人は、かしこく心さとく思はれ、古きにかゝづらひて、とかくとゞこほれる人は、心おそく、いふかひなく思はるゝわざぞかし。

三　わがをしへ子に誡めおくやう

われに從ひてもの學ばんともがらも、わが後にまた善き考のいできたらんには、必ずわが說になづみそ。わがあしき故をいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせんとなればゝにもかくにも道をあきらかにせんぞ、吾を用ふるにはありける。道をおもはで、いたづらにわれを尊まんは、わが心にあらざるぞかし。

四　おのが物學びのありしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなん、よろづよりもおもしろく思ひてよみける。さるはかゞしく師につきて、わざと學問すとにもあらず。何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなくて、たゞ唐の大和のくさ〳〵の書を、あるにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみ

はじめけるを、それはた師にしたがひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき。

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて京になん上りける。さるは十一のとし、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつねの儒學をもせんとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、はじめて契沖といひし人の説を知り、その世に勝れたるほどをも知りて、この人のあらはしたるもの、餘材抄・勢語臆斷などをはじめ、その外もつぎ〳〵にもとめ出でて見けるほどに、すべて

二十あまり　寶曆二年（一七五二）翁二十三歳の時京に上つて儒學を堀景山に學ぶ。

改觀抄　僧契沖の著。百人一首を解釋したもの。

契沖　德川初期の僧。國學者。俗姓下川氏。攝津の人。圓珠庵といふ。元祿十四年（一七〇一）寂、年六十二。

餘材抄　古今和歌集を註釋したもの。二十卷。

勢語臆斷　伊勢物語を註釋したもの。四卷。

歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やう〳〵にわきまへさとりつ。

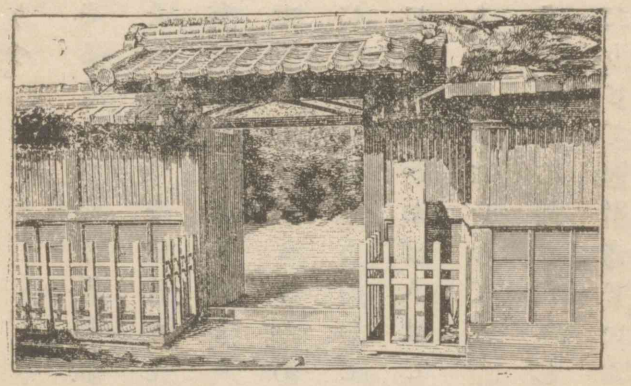
さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心にかなはず、その歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみに、こゝかしこの會などにも出でまじらひつゝよみありきけり。さて人のよむふりは、おのが心にはかなはざりけれども、おのが立ててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてん。

さて後、國に歸りたりしころ、江戸より上れりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居（あがたゐ）の大人（うし）の御名をも始めて知りける。かくて其の書、はじめに一わたり見しには、

冠辭考　賀茂眞淵の著。枕詞を解釋したるもの。十卷。

縣居の大人　賀茂眞淵。德川中世の國學者。遠江岡部の祠官。縣居と號す。明和六年（一七六九）歿、年七十三。

さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまり事ごほくあやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ〳〵にはげにさもやとおぼゆるふし〴〵も出できければ、また立ちかへり見るに、いよ〳〵げにとおぼゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つゝ、つひにいにしへぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみ



本居宣長舊宅

ぞ多かりける。おのが歌まなびの有りしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、古き近き、これやかれやと讀みつるを、二十ばかりのほどより、わきて心ざしありしかど、とり立てて、わざと學ぶことはなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばんとこゝろざしはすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説くおもむきは、みないたくたがへりと、早くさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でんと思ふこゝろざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへす〴〵讀みあぢはふほどに、いよ〳〵心ざし深くなりつゝ、この大人をしたふ心日にそへてせちなりし

田安の殿　徳川宗武。

に、一年この大人、田安の殿の仰せごとをうけたまはり給ひて、この伊勢の國より、大和山城など、こゝかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、この松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きていみじく口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜やどり給へるを、うかゞひまちて、いと〳〵うれしく、急ぎ宿りにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。

一七　國學者の業績

岩城準太郎

岩城準太郎　國文學者。富山縣の人。奈良女子高等師範學校教授。

「獨り燈下の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むものなれ。」とは徒然草の名文句であるが、人間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは卽ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるのでない。相互に他の文章を讀むことによる。矯飾と辭令とを剝ぎ去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民がその祖先と面相接する思ひをするのは、過去の國民の書殘した文學を讀む時である。父祖の遺文に接する時のなつかしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古・太古の國民の、その時代々々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繫がる宿緣を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き生きと今日の我等に見せてくれるのは、卽ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに從つて遺作遺文が亡びる。時代の古きに從つて文筆の人が少い。歷史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど、典籍が稀になるのである。此の稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルム（Film.）である。これを書殘した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選び上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歲の淘汰を經て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

斯う見てくると、古典の研究はたゞに古物いぢりの物ずきでないのみならず、學問のための學問と言ふやうなのんきなものでもない。必要だの不必要だのといふ理屈の問題でもない。實に我等の衷心の要求から止むに止まれぬ感情の問題である。如上の意味に於いて、自分は古典に對して限ない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。此の點に著目し、此の如き見解から、古典の研究を開始したものは、卽ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、從つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者・國語學者にも、國史學者・古典學者にも、神道家・皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。然しこゝで國學者といふのは國文學の創作家でもなく、國語の研究家

でもなく、歴史家でもなく、又神道家でもない。すべてこれらの一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神を以て固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典・古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書「菅家遺誡」などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に國民としての自覺が生じて後でなければ起らぬ。佛學あり漢學あり、こゝに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛教の道理を説くので、こゝに我國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起は此の要求と關係はあるが近古時代の神道は、研究の方法を誤まり頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出來てくるのを待たねばならなかつた。

近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも佛學にも、學者と名づくべき者が出て來た。特に漢學の勢が盛であつた。慶長年間漢學興隆の施設をなしてから約百年、之に刺戟せられて國學も始めて現れた。國學者なるものの出たのはそれから

釋契沖

荷田春滿
本姓羽倉氏。元文元年（一三九六）歿、年六十九。

である。

國學の言葉を新らしい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稲荷の神官であつて、享保十三年、京都の東山

に學校を創立することを幕府に建議した。其の啓文に始めて國學の語を用ひたのである。「文獻不レ足ラ、國學之不レ講ゼラレ、實ニ六百年矣ナリ。」とあるのがそれである。なほ啓文の中には「皇國之學」ともいひ、「國家之學」とも言つて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國學校と出してあるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認めてよろしい。

賀茂眞淵

平田篤胤
氣吹廼舍と號した。佐竹侯に仕へ、天保十四年（一八四三）歿、年六十八。

此の意味での國學者は、萬治・寛文頃から追々現はれて、近く明治時代に及んでゐる。僧契沖・荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤等は、その最も傑出した人物である。

これらの人々の忠實熱心な研究によつて、從來くらがりの中に放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我がなつかしい同胞國民の面影を、まのあたり見るが如く感ずることが出來るやうになつた。今までは折角あの貴重な古典を有つてゐながら、言語解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出來なかつたが、これらの學者は、先づ言語を討究し、傳說を說明し、歌謠を解釋し、史籍・物語等古典の全部にわたつて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐとき、しみ〴〵ありがたさを感じて、その功業を讃美しないではゐられない。（國文學の諸相）

一八　日本民族の獨創力

田中寛一

田中寛一
岡山縣の人。心理學者。文學博士。東京文理科大學教授。

從來、歐米人で日本民族を批評する者は、日本民族に獨創力の缺けて居ることを自明の事實である如くに述べるのが普通であり、日本人自身も亦直ちに之を承認する傾向があつた。日本民族は果して獨創力に於て劣つて居るであらうか。是は極めて興味があり、而して極めて重大な問題である。私は此の問題に對しては、日本民族は獨創力に於て決して劣つて居ないと答へたい。

然るに、現今日本に於ける科學の研究及びその應用に於て、全體として獨創といふものが少い。多くは西洋の摸倣である。又之を歴史に徴するも、見方によつては政治宗教・藝術等に於て殆ど外國の摸倣でないものはないといつてよい。即ち、現代の事實と歴史上の事實が右の樣な次第であるのに、尙日本民族の獨創力を認

める理由は何處にあるか。試みに、その理由を擧げて見よう。

第一に、日本の建國は隣邦支那よりは遙かに後れて居た。日本民族が支那と交通する樣になつたときは、既に彼の國では著しい文化を示して居た。かゝる場合は、先進國の文化を摸倣することが最も自然であり、又最も經濟的な仕方である。而して、それは我が國が鎖國の夢から覺めて、西洋文化に接觸したときにも同樣であつて、その惰性が今日に及んで居るのである。

第二に、過去の歴史に於ては總て外國文化の摸倣の樣であるが、必ずしも摸倣に終つては居ない。即ち、如何なる時代にも先づ摸倣したけれども、次第にその手本から脫化して日本的なものを創造して居る。之を文學についていへば、漢學の輸入についで假名文字の工夫は國文學を發達せしめ、その方面に多くの獨創的なも

のを作り上げて居る。又之を宗教について見るに、親鸞や日蓮の如き日本獨特の新宗教が發生して居る。これをしも獨創といはなければ何を獨創といふか。元來純粹な摸倣もなければ又純粹な獨創もないものである。フイエがいつて居る樣に、摸倣は必ずしも獨創の精神の缺けて居ることを示さない。摸倣と獨創とは隱れた調和を有つて居るもので、互に相反對するものではない。獨創も決して無から起ることはない。タルドが「摸倣は合流して發明となる。」といつたのは正しい。單に表面的觀察をして居るから、日本民族に獨創力がないといふのである。

第三に、民族によつて獨創力を示す方向が異つて居ることを忘れてはならぬ。西洋に創められたもので日本にないものがある代りに、日本特有のものであつて西洋人の企及し得ないものがあ

フイエ　佛蘭西の哲學者。（西暦一八三八―一九二三）

タルド　佛蘭西の社會學者。（西暦一八四三―一九〇四）

る。西洋の管絃樂は日本になかつたけれども、三絃樂や謠物等は日本民族の獨創である。又支那や西洋にある武器はそれ〴〵の民族の特徴を示して居るが、日本刀の製作に至つては如何なる民族にも追從を許さない程度の獨創である。更にわが劍道と柔道に至つては、西洋のフェンシングやボクシングとは全く獨立に發達したもので、その性質は著しく異つて居るのである。

關孝和

第四には、右の如き見地から見れば、過去に於て日本民族中から獨創的天才が輩出して居る。後藤子爵がその著「日本膨脹論」中に掲げられたものだけを摘記しても、百濟河成・巨勢金岡・惠心僧都・雪

フェンシング　Fencing. 劍術。

ボクシング　Boxing. 拳闘。

後藤子爵　名は新平。岩手縣の人。政治家。伯爵。昭和四年歿、年七十二。

舟・元信・探幽・光琳の如き藝術家があり、柿本人麻呂・山部赤人・紫式部・西行・芭蕉・西鶴・近松・馬琴の如き文學者があり、聖德太子・弘法・傳教・道元・法然・親鸞・日蓮の如き宗教家・思想家があり、豐太閤・家康の如き武將があり、藤樹・仁齋・白石・素行・象山・松陰の如き學者・德行家があつた。而してこれ等の人々及びこれ等に匹敵すべき多くの人々は、皆世界的の天才として認められる資格を備へて居るものであつて、唯その業績が西洋にあまり紹介されて居ないだけである。勿論近世に發達した科學的の天才に至つては極めて乏しい。併し、それは摸倣時代を距ることが遠くないからである。而も、乏しいとはいへ、過去に

芭蕉……松尾芭蕉。井原西鶴。近松門左衞門。瀧澤馬琴。
藤樹……中江藤樹。伊藤仁齋。新井白石。山鹿素行。佐久間象山。吉田松陰。

野口英世

於て誇るべき數學的研究があつたことを想ひ出さずには居られない。即ち關孝和等一團の人々の研究の如きはその一例である。第五には、現代に於て日本民族中に獨創的研究を出したものが少くないことである。歐米に發達した科學的研究を輸入して以來約五十年を經過した。其の大部分の歲月は、全然摸倣を事とした。併し、今や種々の科學に於て歐米の學界に出して誇りとするに足る研究が續出しつゝある。米國で活動して居る野口英世博士、又米國で有名になつた故高峰讓吉博士の二人を擧げただけでも十分である。その外水銀から金を作ることに成功した長岡博士、ヴィタミンA

高峰讓吉

關孝和　數學家。通稱新助。上野の人。德川幕府の勘定吟味役・納戸組頭に歷任した。又關派と稱して算法を門人に敎授した。寶永五年（一三〇八）歿、年六十七。

野口英世博士　醫學博士。理學博士。殊に細菌學者として世界的權威であつた。昭和三年歿、年五十三。

高峰讓吉博士　化學者。藥學博士。工學博士。大正十一年ニューヨークで客死。年六十九。

長岡博士　名は半太郎。理學博士。大阪帝國大學總長。

抽出に成功した鈴木博士、神經の傳導性について新しい學說を立てた加藤博士の如き、數へ上げれば世界的の名聲を博して居る人人は所謂自然科學の方面に多數ある。

又最近長足の進歩をなした飛行機について見るに、最初飛行したのは米國のライト兄弟で、それは明治三十六年のことであるが、それよりも十年前に、我が二宮忠八氏は、既に一種の飛行機を發明して居る。然るに西洋人の發明でなければ信用しないといふ當時の時勢が、此の尊い發明を實用に供する所まで發達せしめなかつたのである。

鈴木博士　名は梅太郎。農學博士。東京帝國大學教授。

加藤博士　名は元一。生理學者。醫學博士。慶應義塾大學教授。

ライト兄弟　兄は西暦千八百六十七年、弟は千八百七十一年共にインデアナ州ニューカッスル附近に生れた。

二宮忠八　大阪の人。飛行奉齋會長。明治二十二年合理飛行機を發明し同二十四年丸龜に於てその模型を飛翔させた。

翻つて文化的或は精神科學の方面を見るに、その研究が多くは日本語を以て發表せられて居る爲に、世界的に注意を引かないのであるが、今まで發表せられた中に、獨創的研究と認むべきものは決して尠くない。

第六には、日本の過去に於ける社會的環境が、獨創力を現はすに不適當であつたことである。即ちその一は、政權の存在が度々變轉して獨創力を現はす機會を少くしたこと。その二は、階級制度が發達して職業が殆ど各〻の家族に固定したことである。農業に從事する者は代々農業に、武人は代々武人であつた。政權を握るほどの家柄のものは、民族中でも最も優れた素質の所有者であるが、それが階級制度の結果として代々同じ職業に從ひ、而も勢力の消長が極めて頻繁であつたから、獨創力を武事以外に發揮することが尠かつたのである。

以上の諸點を綜合して考へると、日本民族は決して獨創力に於て缺けて居るのでないことが解るであらう。從來諸外國人の日

本民族についての批評は、日本民族に特有な方面を見のがして居た傾向があり、日本人自身は外國にあるものだけについて日本民族を評價してゐたのである。之を繪畫の方面について見ても、日本人が西洋畫を學び始めてから、餘り年月を經てゐない。從つて西洋畫で傑出した作がまだ出なかつた。然るに長い歴史を有する日本畫では、到底外國人の企及し得ない美點があり、傑作があることを忘れてゐる。西洋畫と日本畫とはその力の入れ所が異つて居るのに氣が附かないで、何でも西洋流にやらなければならぬと考へて自ら卑下するものが多かつた。

之を思想の方について見ても同樣であつて、西洋流の考へ方と東洋流の考へ方との間には著しい相違がある。かれは分析を主とし、これは綜合を主とする。何れにもよい點があつて、何れを優

れて居るともいはれない。勿論、日本の思想は支那の思想の影響を受けては居るが、その間に日本人の卓見が少くない。之れを捨てゝ顧みなかつたのは、西洋文明を取入れたとき、その外形の整然たるに驚いて、自然、西洋崇拜の風を生じた結果に外ならない。

（日本民族の將來）

後篇

徒然草抄

徒然草に就いて

新村 出

新村 出
東京の人。文學博士。京都帝國大學教授。

花は盛りに
百三十七段。

法然上人が
三十九段。

兼好法師

徒然草は私が少時から愛誦した書物の一つで、今なほこれを讀む毎に感興を新にすると同時に、往年の思出に耽ることが多い。國文の讀本で「花は さかりに月は隈なきをのみ」とあるあの名句を誦したのが抑の始まりで、それから今日に至るまで、をりにふれてこの書を繰返したことが何度あるだらう。法然上人が念佛中ねねむりをしたならば、眼がさめて後再び念佛すればそれでよ

ふれ〳〵
百八十一段。

兼好筆蹟
かにはほひ妙なる色にあらはれてみのりの花や春をつぐらむ　兼好

一昨年
大正四年。
今上
大正天皇。
丙侍所の
二十三段。

いのだと人に說き諭されたとある一條を、かの書から抄錄して、その頃心學道話めいたことを好んでゐた鄕里の老父のもとに送つた事などが、私が徒然草を利用した最初かと記憶してゐる。もう一つ覺えてゐるのは「ふれ〳〵こゆき」の童歌を書中から見出して、「雪やこん〳〵」と興じた遠い〳〵幼時を追想して、懷かしさに堪へなかつた事である。こ

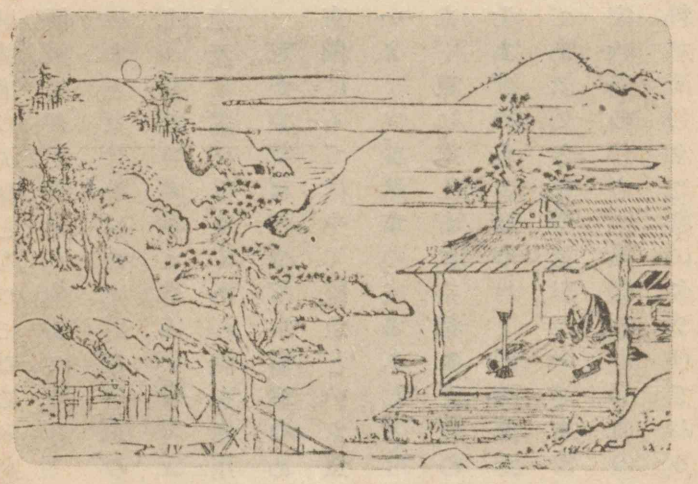
んなうぶな敎訓や詩趣に感じ入つてゐたのも、數へれば、もう二十四五年前になる。

近きころの聯想を記してみると、第一に一昨年今上御卽位式のあくる日の夕方、賢所大前の光景を拜した時には、「內侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなり。」と本書に書かれた一節を思ひ浮べずには居られ

諒闇の年
二十八段。

唐の物は
百二十段。

なかつた事である。それにひきかへ、「諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。」といふ一段にて、始めて諒闇といふ文字を覺えたのも、少時この徒然草によつてであつたから、先つころの諒闇のをり、「異樣なるぞゆゝしき」有樣を見るにつけても、しば〳〵この書のその節が眼に映じたのであつた。斯る尊きあたりの御事はさておき、國家經濟上の大事たる海外貿易に關しては、「兼好法師がいちはやくも、「唐のものは藥の外はなくとも事かくまじ、書どもはこの國に多くひろまりぬれば」と說破して、鎖



兼好閑居（古版徒然草）

卷末の問答　二百四十三段。
上田敏　文學博士。京都帝國大學教授。大正五年歿。
鯉のあつもの　百十八段。
堅魚　百十九段。
松下禪尼　百八十四段。
平家物語　二百二十六段。
梁塵祕抄　十四段。
道眼上人　百七十九段。

國論者の先驅となつてゐる名高いその一條を讀むと、この隨筆の史的價値はよくわかるやうに思ふ。法師が八つになつた年、佛はどんなものかと父に尋ねたとある卷末の問答は、妙味ある言草として、何人も均しく嘆稱する所であるが、曾て上田敏さんは、その伊曾保物語考に於て、意表な處にうまくあの話を活用したことがある。

私が京都に移つてから、鯉のあつものに舌をうつ機は度重なつても、東國にもてはやす堅魚といふ魚を口にすることの少いのを嘆じつゝ、いよ〳〵徒然草の或るふし〴〵に興味を感ずることが深くなつて來た。更に進んでは、京都ことばの變遷をたどるにつけ、關東武士の性行をあげつらふにつけ、この隨筆から拾ひ得られる材料のなか〳〵豐富であることに益、氣がついて來た。松下禪尼の古い訓言はもとより、平家物語の作者、梁塵祕抄の郢曲のことなど、人口に膾炙する得がたき史料が、同じくこれに含まれてゐるのは、私の今さら指摘するまでもない所である。つい近頃にも入宋の沙門道眼上人の事歷は、もう少しわからぬものかと、この書をひろげながら一二の佛教史家と話し合うた事があつた位で、隱れたる史實が散見してゐることが少からぬのは、徒然草の價値をして一層增さしめるものと云へよう。

徒然草の文學史上の價値などは、茲に更めて絮說するの要はない。現に私などの精神生活・研究生活の上に少からぬ交涉をもつてゐるのが、何よりの價値だ。詩趣逸興さては教訓を、現代の人々にも與へることの大いなるを思へば、本書の價値は眞に不滅である。（南蠻更紗）

○

兼好、本姓は卜部、名は兼好、世々京の吉田社の祠官であつたから、又吉田姓を稱した。後宇多院に仕へて寵用せられ、左兵衞尉に任ぜられたが、院崩御の後、世を遁れて佛に歸し、俗名をそのまゝに兼好といつた。木曾に行脚して山中に廬を結び、諸國を遍歷して悠々自適したが、久しからずしてまた京に歸り、洛西雙岡に住み、晩年伊賀に至り、國見山の麓に寂したといふ。時に正平五年（一〇一二年）、年六十八。兼好人と爲り

和歌四天王
淨辨・慶運・頓阿・兼好。

洒脫、學、神儒佛老に通じ、文章和歌を善くして、當時和歌四天王の一に數へられた。その著には徒然草の外に歌集一卷がある。

竹の園生
親王。漢の文帝の皇子である梁の孝王が竹園に住まれた故事による。

一の人
攝政又は關白。

舍人など賜はる際
攝政關白は十人、大臣大將は八人、納言參議は六人、中將は四人、少將は二人の舍人を賜はる。

木のはし
思はん子を法師になしたらんこそ心苦しけれ。さるはいと賴もしき業を、只木の端などの樣に思へるこそいとほしけれ。（枕草子）

清少納言
一條天皇の皇后に仕へた女官。

一　つれ〴〵なるまゝに

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべきことこそおほかめれ。みかどの御位はいとも かしこし。竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有樣はさらなり、たゞ人も舍人などの賜はる際はゆゝしと見ゆ。その子、うまごまでは、はふれにたれど猶なまめかし。それより下つかたは、程につけつゝ、時に逢ひしたり顏なるも、自らはいみじと思ふらめど、いとくちをしし。

法師ばかり羨ましからぬ者はあらじ。「人には木のはしのやうに思はるゝよ。」と、清少納言がかけるも、げにさる事ぞかし。勢猛に

罵りたるにつけていみじとは見えず。

人はかたち有様の優れたらんこそあらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞おほからぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えんこそ、くち惜しかるべけれ。品かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心ざまよき人も、ざえなくなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ本意なきわざなれ。

ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人のかゞみならんこそいみじかるべけれ。（第一段）

二　此の木なからましかば

神無月のころ、栗栖野（くるすの）といふところを過ぎて、ある山里にたづね入ることゝ侍りしに、はるかなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に、菊、紅葉などをりちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ、すこしことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。（第十一段）

栗栖野　京都府宇治郡、醍醐寺の邊。

このきなからましかば

三　同じ心ならん人と

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひなぐさまんこそ、うれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんとむかひ居たらんは、ひとりある心地やせん。たがひに言はんほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝか違ふところもあらん人こそ、「我はさやは思ふ。」など、爭ひ惡み、「さるからさぞ。」とも打語らはば、つれ〴〵なぐさめと思へど、げにはすこしかこつ方も、われとひとしからざらん人は、大方のよしなし事いはんほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかに隔りたる所のありぬべきぞ、わびしきや。（第十二段）

四　旅

いづこにもあれ、しばし旅だちたるこそ、目さむる心地すれ。そ

のわたりこゝかしこ見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたよりもとめて、文やる、「その事かの事、便宜に忘るな。」など、いひやることをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社などに忍びてこもりたるもをかし。（第十五段）

五　折節のうつりかはり

をりふしの移り變ることこそ、物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは春のけしきにこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、桓根の草萌え出づる頃より、やや春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも

物のあはれは春はたゞ花の一重に咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる（拾遺集、讀人不知）

花橘に　五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（在原業平）

梅の匂　お前近き紅梅の（中略）橘ならねど昔思ひ出でらるゝつまなり（源氏物語）

藤のおぼつかなき　見るもなほおぼつかなきは春の夜の霞のうちに咲ける藤波（和泉式部）

灌佛　四月八日卽ち釋迦の誕生日に佛像に香水を灌ぐ佛事。

祭　賀茂祭。陰曆四月の中の酉の日。

六月祓　六月三十日に行はれる行事。夏越祓。

棚機祭る　七夕祭、卽ち七月七日の星祭をいふ。

雨風うち續きて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、古の事も立返り戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき樣したる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、「世のあはれも人のこひしさもまされ。」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。皐月、あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたゝくなど心細からぬかは。水無月の頃、あやしき家に夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取りあつめたることは秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。

御佛名　十二月十九日より三日間、禁中にて行はれた佛事。

荷前の使　年の暮に初穗を主なる陵墓にすゝめる爲に遣される勅使。

追儺　大晦日の夜、禁中で鬼を追拂ふ樣をした公事。おにやらひ。

四方拜　元旦未明、天皇の天地四方山陵を拜し給ふ儀式。

いひつゞくれば、皆源氏物語枕草紙などに事ふりにたれど、同じことまた今さらにいはじとにもあらず。おぼしきこといはぬは腹ふくるゝわざなれば筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けくすめる廿日あまりの空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取りかさねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。

追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜い

たう暗きに松ごもともして、夜半すぐるまで人の門敲き走りありきて、何事にかあらん、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、このごろ都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。（第十九段）

六　心なぐさむ事

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろき物はあらじ。」といひしに、又一人「露こそあはれなれ。」と、爭ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月

沅湘　慮橘花開楓葉衰。デ、ヲレレノニカマシ出レ門何處望ニ京師ヲ。沅湘日夜東流去。不ト爲ニ愁人一住少時ヲ。（戴叔倫）

嵇康　竹林七賢人の一人。

山澤に遊ンデ山澤ニ觀レバ魚鳥ヲ、心甚樂ダムノ之。（文選）

露臺　宮中にある屋根の無いうてな。

朝餉　主上に朝の御膳を奉る所。清涼殿の中に在る。

陣　節會などの時、諸卿の坐る所。

よんのおとど　天子の御寢所。

花は更なり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて、きよく流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る愁人の爲にとゞまること少時もせず。」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も「山澤に遊びて魚鳥を觀れば、心たのしぶ。」といへり。人遠く、水草きよき所に、さまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。（第二十一段）

七　末の世とはいへど

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有樣こそ、世つかずめでたきものなれ。露臺・朝餉・何殿・何門などは、いみじともいはゞ聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき、小蔀・小板敷・高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ。「陣の夜のもうけせよ。」といふこそいみじけれ。よんのおとゞのをば「かいとともし、とうよ。」などいふ、まためでた

し。上卿の、陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこにねぶり居たるこそをかしけれ。「内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなり。」とぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

（第二十三段）

徳大寺太政大臣　藤原實基。

八　諒闇の年

諒闇の年ばかりあはれなることはあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷を下げ、蘆のみすをかけて、布の帽額あら〳〵しく、御調度ごもおろそかに、みな人の装束・太刀・平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき。（第二十八段）

九　過ぎにし方

しづかに思へば、よろづに過ぎにし方のこひしさのみぞせんかたなき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りしたゝめ、殘しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪書きすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心なく變らず久しき、いとかなし。（第二十九段）

一〇　人の亡きあと

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰の程、山里などにうつろひて、便あしくせばき所にあまたあひ居て、後の業ども營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐる程ぞ物にも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふこともなく、我賢げに物ひきしたゝめ、ちりぢりに行きあかれぬ。もとの住家に歸りてぞ、更に悲しき事は

去る者は
去者日以疎。生者日以親。（文選）

いづれの人
古墓何代人。不知姓與名。化爲路傍土。年々春草生。（白氏文集）

多かるべき。

「しかく〳〵の事は、あなかしこ、跡のため忌むなることぞ。」などいへることこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。

年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、「去る者は日々に疎し。」といへることなれば、さはいへど、そのきはばかりは覺えぬにや、よしなしごといひて、うちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつゝ見れば、程なく卒都婆も苔蒸し、木の葉降り埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞことゝふよすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらん程こそあらめ、そもまた程なく失せて、聞き傳ふるばかりの末々はあはれとやはおもふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐に咽びし松も、

薪に摧かれ
古墓犂爲レ田。松柏摧爲レ薪。（文選）

千年を待たで薪に摧かれ、古き墳は鋤かれて田となりぬ。そのかただに無くなりぬるぞ悲しき。（第三十段）

一一　雪のあした

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべきことありて文をやるとて、雪の事は何ともいはざりしかへりごとに、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬ程のひがく〳〵しからん人のおほせらるゝこと聽きいるべきかは。かへすく〳〵もくちをしき御心なり。」といひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。（第三十一段）

一二　荒れたる庭

九月廿日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありく事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れ

たる庭の露繁きに、わざとならぬ匂しめやかに打ちかをりて、忍びたるけはひ、いと物哀なり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶事ざま優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今すこし押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。其の人、程なく失せにけりとぞ聞き侍りし。（第三十一段）

法然上人　淨土宗の開祖。建暦二年（一八七二）寂、年八十。

念佛　所謂稱名念佛で南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて念ずること。

一三　法然上人

或人法然上人に、「念佛の時、眠におかされて行を怠り侍ること、いかゞしてこのさはりをやめ侍らん。」と申しければ、「目の覺めたらんほど念佛し給へ。」と答へられたりける、いと尊かりけり。又「往生は一定と思へば一定、不定と思へば不定なり。」といはれけり。これも尊し。又「疑ひながらも念佛すれば往生す。」ともいはれけり。これもまた尊し。（第三十九段）

賀茂　京都の北。上賀茂神社。

一四　木の股の法師

木の股の法師

五月五日賀茂の競馬（くらべうま）を見侍りしに、車の前に雜人立ち隔てゝ見えざりしかば、各、おりて埒の際によりたれど、殊に人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。

かゝる折に、向ひなる樗の木に法師の登りて、木の股についゐて物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、落ちぬべき時に目を

覺ますこと度々なり。これを見る人、嘲りあざみて、「世の痴者かな、かく危き枝の上にて、安き心ありて眠るらんよ。」といふに、我が心に、ふと思ひしまゝに、「我等が生死の到來、只今にもやあらん。それを忘れて、物見て日をくらす、愚なることは尙勝りたるものを。」といひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最も愚に候ふ。」といひて、皆うしろを見かへりて、「こゝへ入らせ給へ。」とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき。かほどの理、誰かは思ひ寄らざらんなれども、折からの思ひかけぬ心地して、胸に當りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。（第四十一段）

狩衣　當時の平常服。まる襟で袖にくゝりがある。
指貫　裾の方を紐でくゝる袴。

一五　稲葉の露

あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の月影に色合さだかならねど、艶やかなる狩衣に濃き指貫、いとゆるゞきたるさまにて、

さゝやかなるわらは一人を具して、遙かなる田の中の細道を稲葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて見送りつゝ行けば、笛を吹止みて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。榻に立てたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しか〳〵の宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや。」といふ。御堂のかたに法師ども參りたり。夜寒の風にさそはれくる空だきものの匂も身に沁む心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の、おひ風ようなど、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。

心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲のゆき

惣門　外構の正門。
榻　しぢ。車の轅を載せる臺。
寢殿　正殿。

きも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。（第四十四段）

一六　石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うくおぼえて、ある時思ひたちて、たゞひとりかちよりまうでけり。極樂寺・高良などをがみて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人に逢ひて、「年來思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。（第五十二段）

仁和寺　京都府葛野郡花園村。
石清水　京都府綴喜郡男山八幡宮。
極樂寺　男山の麓にある社。
高良　男山の麓にある社。

一七　足鼎

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名殘とて、おのおの遊ぶことありけるにゐひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたればつまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ることかぎりなし。暫しかなでて後、拔かんとするに、おほかたぬかれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打ちわらんとす

仁和寺の法師

れど、たやすくわれず、響きてたへがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角のうへに帷子を打ちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人のあやしみ見ることかぎりなし。くすしのもとにさしいりて對ひゐたりけん有樣、さこそことやうなりけめ。物を言ふもくゞもりごゑに響きて聞えず。「かゝることは文にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、また仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てゝ、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。（第五十三段）

一八　名を聞くより

名を聞くより、やがて面影は、おしはからるゝ心地するを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家のそこほどにてぞありけんと覺え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかくおぼゆるにや。又いかなるをりぞ、たゞいま、人のいふ事も、目に見ゆる物も、我が心のうちも、かゝる事の、いつぞやありしがとおぼえて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心地のするは、われればかりかく思ふにや。（第七十一段）

一九　いやしげなるもの

居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、

持佛堂に佛の多き、前栽に石草木の多き、人にあひて言葉の多き、願文に作善おほく書きのせたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。（第七十二段）

二〇　入りたゝぬさま

何事も、入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世に恥かしき方もあれど、自らも、いみじと思へるけしき、かたくなり。よくわきまへたる道には、必ず口おもく問はぬかぎりは、言はぬこそいみじけれ。（第七十九段）

二一　人の心

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されども、おのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは世の常なり。至りて愚なる人は、たま〳〵賢なる人を見て、之をにくむ。「おほきなる利を得んがために、すこしきの利を受けず、いつはり飾りて、名を立てんとす。」とそしる。おのれが心にたがへるによりて、此のあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性、うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。惡人のまねとて、人を殺さば惡人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばんを賢といふべし。（第八十五段）

下愚の性
上智與二下愚一不レ移。（論語）

驥をまなぶ
哧レ驥之馬亦驥之乘也。哧レ顏之人亦顏之人也。（楊子法言）

宇治
京都府宇治郡宇治川の北部宇治村、及び南部久世郡宇治町一帶の稱。

二二　下部に酒飲ますること

下部に酒飲ますることは心すべきことなり。宇治にすみける

をのこ、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申し睦びけり。ある時むかへに馬を遣はしたりければ「はるかなる程なり、口つきのをのこにまづ一度せさせよ。」とて、酒を出したれば、さし受け〳〵よゝと飲みぬ。太刀うちはきてかひ〳〵しげなれば、賴もしくおぼえて召具して行くほどに、木幡のほどにて奈良法師の兵士數多具して遇ひたるに、このをのこ立向ひて「日暮れにたる山中に、怪しきぞ、とまり候へ。」といひて、太刀を引拔きければ、人も皆太刀拔き、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて「うつし心なく醉ひたるものに候。枉げてゆるし給はらん。」といひければ、各嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて「御坊は口惜しきことし給ひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名仕らんとするを、拔ける太刀空しくなし給ひつること。」と怒りて、ひた斬りに

木幡　京都府宇治郡。
奈良法師　奈良の東大寺興福寺などの僧侶。

斬り落しつ。さて「山だちあり。」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山だちよ。」といひて、走りかゝりつゝ斬りまはりけるを、あまたして手負はせ、うち伏せて縛りけり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。淺ましくて、をのこどもあまた走らかしたれば、具覺坊は、梔原にによび臥したるを、求め出でて舁きもてきつ。辛き命生きたれど、腰斬り損ぜられて、かたはになりにけり。（第八十七段）

二三　猫また

「奥山に猫またといふものありて人を食ふなる。」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて猫またになりて、人とることはあなるものを。」といふものありけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、「ひとりあ

行願寺　京都一條の革堂の寺號。

りかん身は心すべきことにこそ。」と思ひける頃しも、あるところにて、夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小河のはたにて、音に聞きし猫また、過たず足許へふとより來て、やがて搔きつくまに、頸のほどをくはんとす。肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足もたゝず、小川へころび入りて、「助けよや。ねこまた、よやよや。」とさけべば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こはいかに。」とて、河の中よりいだき起したれば、連歌のかけものとりて、扇・小箱などふところに持ちたるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。（第八十九段）

小川　賀茂川よりせき入れた一條邊の溝の名。

二四　もろ矢

ある人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて、初の矢に、なほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせんとおもはんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねてねんごろに修せん事を期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。なんぞ只今の一念において、たゞちにする事の甚だ難き。（第九十二段）

二五　寸陰惜しむ人なし

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。愚にし

て怠る人の爲にいはゞ、一錢かろしといへども、これをかさぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人は、一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、たちまちに至る。されば道人は、ことほく日月を惜しむべからず。たゞ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし。もし人來りて、「わが命、明日は必ず失はるべし。」と告げ知らせたらんに、今日のくるゝ間、何事をかたのみ、何事をか營まん。われらが生ける今日の日、なんぞ其の時節に異ならん。一日のうちに飲食・便利・睡眠・言語・行歩、やむことを得ずして、おほくの時を失ふ。そのあまりのいとまいくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみならず、日を消し月をわたりて一生をおくる、最も愚なり。謝靈運は、法華の筆受なりしかども、心常に

謝靈運　晉人。文章の美江左第一と稱せられた。

風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮のまじはりをゆるさざりき。しばらくも是なき時は死人に同じ。光陰何のためにか惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。（第百八段）

惠遠　晉代の人。廬山虎溪の東林寺に住した。

白蓮　白蓮社といつて惠遠の院の名である。謝靈運がこれに入らうとしたが惠遠はその心に雜念があるといつて許さなかつた。

二六　高名の木登り

高名の木登りといひしをのこ、人をおきてゝ、高き木にのぼせて、梢をきらせしに、いと危く見えしほどは、いふ事もなくて、おるゝときに、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」と詞をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかに斯くいふぞ。」と申しはべりしかば、「その事に候。眼くるめき、枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕ることに候。」といふ。あやしき下臈なれども、

聖人のいましめ
君子安而不忘危。（易繫辭）

遠きものを
不貴遠物則遠人格。（尚書）

得がたき寶
不貴難得之貨、使民不爲盜。（老子）

雨にむかひ
和漢朗詠集に源順の「對雨懸月」と題する聯句がある。

たれこめて
たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり（古今集、藤原因香）

聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。（第百九段）

二七　唐のものは

唐のものは藥のほかはなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きも寫してん。もろこしぶねのたやすからぬ道に、無用のものどものみとり積みて、所せく渡しもて來る、いとおろかなり。「遠きものを寶とせず。」とも、また「得がたき寶を貴まず。」とも、書にも侍るとかや。（第百二十段）

二八　花はさかりに

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも、猶あはれに情ふかし。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌の

ことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ。」とも、「障る事ありて、まからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふ習ひはさる事なれど、ことにかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。」などはいふめる。

萬の事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、深き山の杉のこずゑに見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさ

らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人はひとへにすける樣にも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舍の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、ては大きなる枝、心なくをり取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、萬の物よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見し樣、いとめづらかなりき。「見ごといと遲し。そのほどは、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、圍碁・雙六などあそびて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候。」といふときに、おのおの肝つぶるゝやうに爭ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でて押しあひつゝ、一事も見漏らさじとまもりて、「とあり、かか

祭　賀茂の祭。昔は四月の中の酉の日に行はれた。

り。」と物ごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らんまで。」といひて下りぬ。たゞ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、睡りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕へにたちゐ、人のうしろにさぶらふは、樣あしくも及びかゝらず。わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明けはなれぬ程、しのび寄する車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひ寄すれば、牛飼下部などの見知れるもあり。をかしくもきら〳〵しくも、さまざまに行きかふ、見るもつれ〴〵ならず。暮るゝ程には、立て並べつる車ども、所なく並みゐつる人も、いづかたへか行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・疊も取りはらひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られ

葵かけわたして　賀茂の祭には簾・柱などに葵を懸ける。一名葵祭。

てあはれなれ。　大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。

かの、棧敷の前をこゝら行きかふ人の、見知れるがあまたあるにて知りぬ、世の人數もさのみは多からぬにこそ。　この人皆失せなん後、わが身死ぬべきに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなるうつはものに水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。　都のうちに多き人、死なざる日はあるべからず。　一日に一人二人のみならんや。　鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも送る數多かる日はあれど、おくらぬ日はなし。　されば棺をひさぐもの、造りてうち置くほどなし。　若きにもよらず、強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。けふまでのがれ來にけるは有りがたき不思議なり。　暫しも世をのどかには思ひなんや。　兵のいくさに出づるは、死に近きことを

鳥部野　東山五條阪附近。古來火葬場として名高い。

舟岡　舟岡山。愛宕郡大宮村にある。鳥部野と共に古來よりの火葬場。

知りて、家をも忘れ、身をも忘る。　世をそむける草の庵には、靜かに水石をもてあそびて、これをよそに聞くと思へるは、いとはかなし。靜かなる山の奥、無常のかたききほひ來らざらんや。　その死にのぞめること、いくさの陣にすゝめるにおなじ。（第百三十七段）

二九　能をつかんとする人

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、うち〳〵よく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心憎からめ。」と常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。　いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、妄りにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、德たけ、人に許されて、雙なき名を得ることなり。　天下

の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人、道のおきて正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

（第百五十段）

三〇　一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道の筵に臨みて、「あはれ、わが道ならましかば、かくよそに見侍らじものを。」といひ、心にも思へること、常の事なれど、世にわろくおぼゆるなり。知らぬ道のうらやましくおぼえば、「あな羨まし。などか習はざりけん。」といひてありなん。わが智をとりいでて、人にあらそふは、角あるものの、角をかたぶけ、牙あるものの、牙をかみいだすたぐひなり。人としては、善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他にまさる事のあるは、大きなる失

なり。品の高さにても、才藝の優れたるにても、先祖のほまれにても、人にまされりと思へる人は、たとひ詞に出でてこそ言はねども、内心にそこばくのとがあり。愼みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひ消たれ、わざはひをも招くは、たゞ此の慢心なり。一道にも、まことに長じぬる人は、みづから明かに其の非を知るゆゑに、こころざし常にみたずして、つひに物にほこる事なし。

（第百六十七段）

三一　さしたる事なくて

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、其の事はてなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人とむかひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、よろづの事さはりて、時をうつす。たがひのため益なし。

いとはしげに言はんもわろし。心づきなき事あらん折は、なかなかそのよしをもいひてん。同じ心にむかはまほしく思はん人のつれ〴〵にて、今しばし。今日は心しづかに。」などいはんは、このかぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに、人の來りて、のどかに物がたりして歸りぬる、いとよし。また「文も久しく聞えさせねば。」などばかり、いひおこせたる、いとうれし。（第百七十段）

阮籍　晉代の人。竹林七賢人の一人。心にあふ友には青眼をし、あはぬ友には白眼をしたといふ。

三二　降れ〴〵こ雪

「降れ〴〵こ雪、たんばのこ雪。」といふこと、米搗き篩ひたるに似たれば粉雪といふ。「たまれこ雪。」といふべきを誤りて、「たんばの」とはいふなり。「垣や木のまたに。」と歌ふべし。」と、あるものしり申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽の院をさなくおはしまして、雪の

降るにかく仰せられけるよし、讃岐の典侍が日記に書きたり。（第百八十一段）

讃岐の典侍　堀河天皇の官女。天皇御病氣の頃より鳥羽天皇御即位までを記した日記三卷がある。

三三　松下禪尼

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝ事ありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られければ、せうとの城介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜はりてなにがし男に張らせ候はん、さやうの事に心得たるものに候。」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、猶一間づゝ張られけるを、義景、「みなを張りかへ候はんは、遙かにたやすく候べし。まだらに候も見ぐるしくや。」と重ねて申されければ、「尼も後はさわ〴〵と張りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり。物はやぶれたる所

時頼　北條氏。鎌倉五代の執權。

禪尼　安達景盛の女。北條時氏の室。

義景　安達氏。秋田城介となる。

聖人の心
子曰、以レ約ヲ失レ之ヲ者鮮シ矣。
子曰、奢ナレバ則不孫ナリ、儉ナレバ則固ナリ。與ヨリハ不孫ナラン一寧ロ固ナレ。（論語）

ばかりを修理して用ふることぞと、わかき人に見ならはせて心づけんためなり。」と申されける、いと有りがたかりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつほどの人を子に持たれけるぞ、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。（第百八十四段）

三四　第一の事を

導師
佛事説法のとき主となる僧。

あるもの、子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、説經などして世渡るたつきともせよ。」といひければ、をしへのまゝに説經師にならんために、まづ馬に乘りならひけり。「輿・車持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、もゝじりにて落ちなんは心うかるべし。」とおもひけり。次に、「佛事の後、酒などすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべし。」とて、早歌といふことをならひけり。二つの業やう〳〵境に入りければ、いよ〳〵よくしたく覺えてたしなみける程に、説經習ふ隙なくて年よりにけり。

早歌
後世の小唄の類。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこのことあり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しく、あらますことども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、事毎になす事なくして、身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず。悔ゆれども取りかへさるゝ齢ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

あらます事
豫定の事。

されば一生のうちに、むねとあらまほしからんことの中に、いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一の事を案じさだめて、その外

は思ひすてて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の來らんうちに、少しも益のまさらん事をいとなみて、その外をばうち捨てて、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。

たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすてて大につくがごとし。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につくことは易し、十を捨てて十一につくことは難し。一つなりともまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて東山に用ありて、すでに行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべきことを思ひ得たらば、門よりかへ

東山　京都の東方につらなる山々の總稱。
西山　東山に對して西の方嵯峨方面の山をいふ。

りて西山に行くべきなり。「こゝまで來着きぬれば、この事をば先づいひてん。日をさゝぬことなれば、西山の事は、歸りてまたこそ思ひ立ため。」と思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事に換へずしては、一の大事成るべからず。

登蓮法師

人の數多ありける中にて、或者、「ますほの薄・まそほの薄などいふ

事あり。渡部の聖、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある。貸し給へ。」かの薄の事習ひに、渡部の聖のがり尋ね罷らん。」といひけるを、「餘りに物騒がし。雨止みてこそ。」と人のいひければ、「むげの事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや。」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゝしく有難う覺ゆれ。

「敏き時は則ち功あり。」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。此の薄を、いぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

（第百八十八段）

渡部の聖　攝津の渡邊に居た僧といふ。
登蓮法師　詞花集以下の勅撰和歌集中の歌人。
敏き時は則有レ功（論語）

三五　最明寺入道

平宣時朝臣、老の後むかしがたりに、「最明寺入道、ある宵の間に呼ばるゝことありしに、「やがて。」と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使來りて、「直垂などのさぶらはぬにや。夜なればことやうなりともとく。」とありしかば、なえたる直垂、うち〳〵のまゝにてまかりたりしに、銚子にかはらけ取添へてもて出でて、「この酒をひとりたうべんがさう〳〵しければ申しつるなり。肴こそなけれ。人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求めたまへ。」とありしかば、紙燭さしてくま〳〵を求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求めえて候。」と申しゝかば、「事足りなん。」とて、こゝろよく數獻に及びて、興に入られ侍りき。その世にはかくこそ侍りしか。」と申されき。

（第二百十五段）

三六　人の物を問ひたるに

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝに云はん

最明寺入道　北條時頼。平宣時　北條氏。別姓大佛。時房の孫。

は、をこがましとにや、心まごはすやうに返り事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほ定かにと思ひてや問ふらん。又まことに知らぬ人も、などかなからん。うらゝかに言ひ聞かせたらんはおとなしく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さても其の人の事の淺ましさ。」などばかり言ひ遣りたれば、いかなる事のあるにかと、おしかへし問ひにやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから、聞き漏らすあたりもあれば、おぼつかなからぬやうに告げやりたらん、惡しかるべき事かは。かやうの事は、物なれぬ人のある事なり。（第二百三十四段）

三七　主ある家には

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入り來ることなし。主なき所には、道行く人みだりに立入り、狐梟やうのものも、人げにせ

出雲　兵庫縣（丹波）桑田郡に出雲神社がある。今國幣中社。

大社　出雲の大社。簸川郡杵築町。

かいもちひ　「搔煉（かへり）の餅」の義。牡丹餅。お萩。

かれねば、所得顔に入り住み、こだまなどいふけしからぬかたちも現るゝものなり。また、鏡には色形なきゆゑに、よろづのかげ來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虛空よく物を容る。われ等が心に念々のほしきまゝに來りうかぶも、心といふもののなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちにそこばくの事は入り來らざらまし。（第二百三十五段）

三八　聖海上人

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめでたく造れり。志（し）太（だ）の何がしとかや知る所なれば、秋の頃、聖海（しやうかい）上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拜みに。かいもちひ召させん。」とて、具しもて行きたるに、各、拜みてゆゝしく信起したり。御前なる獅子・狛犬、背きてうしろざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あ

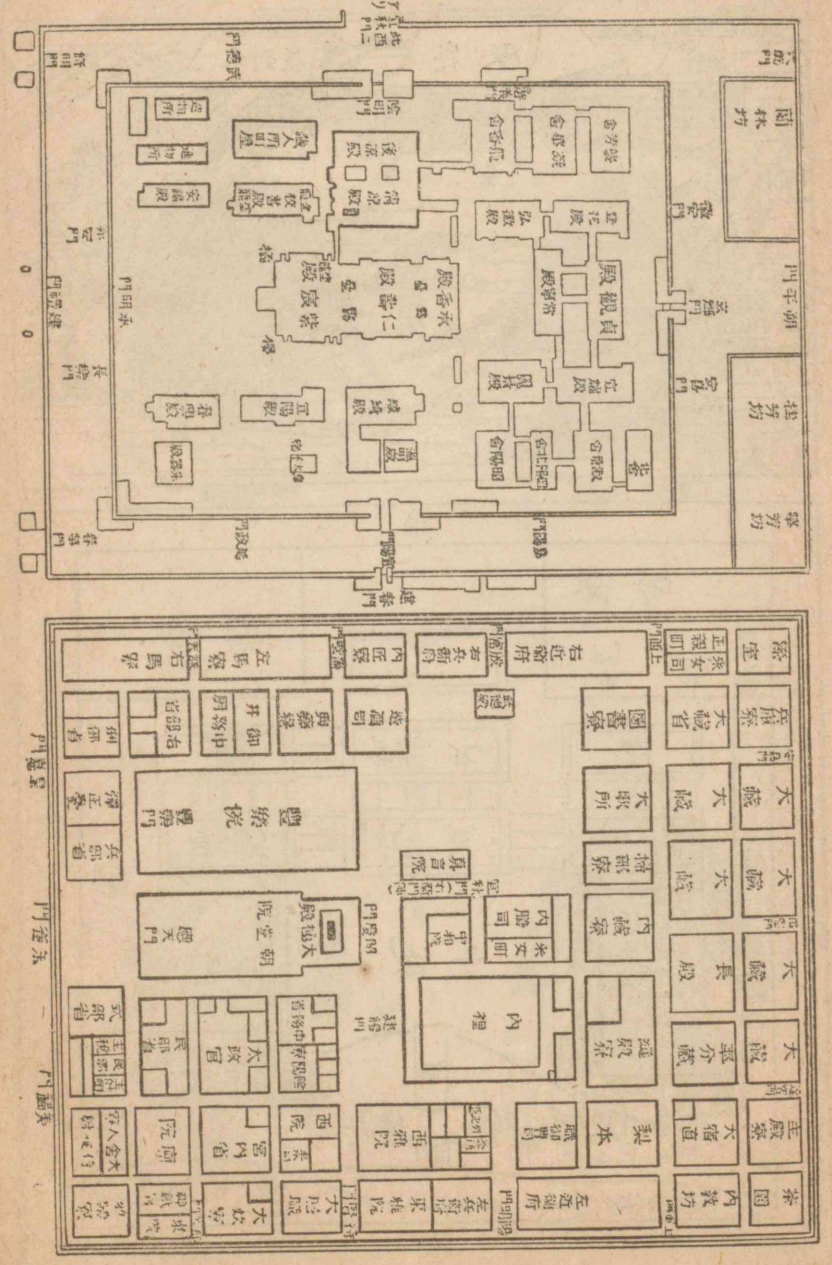
なめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深きゆゑあらん。」と涙ぐみて、「いかに殿、ばら、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり。」といへば、おの〳〵恠しみて、「まことに他にことなりけり。都のつとに語らん。」などいふに、上人猶ゆかしがりて、おとなしく、ものの知りぬべき顏したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習あることに侍らん。ちと承らばや。」といはれければ、「そのことに候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候事なり。」とて、さしよりて据ゑ直して去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。（第二百三十六段）

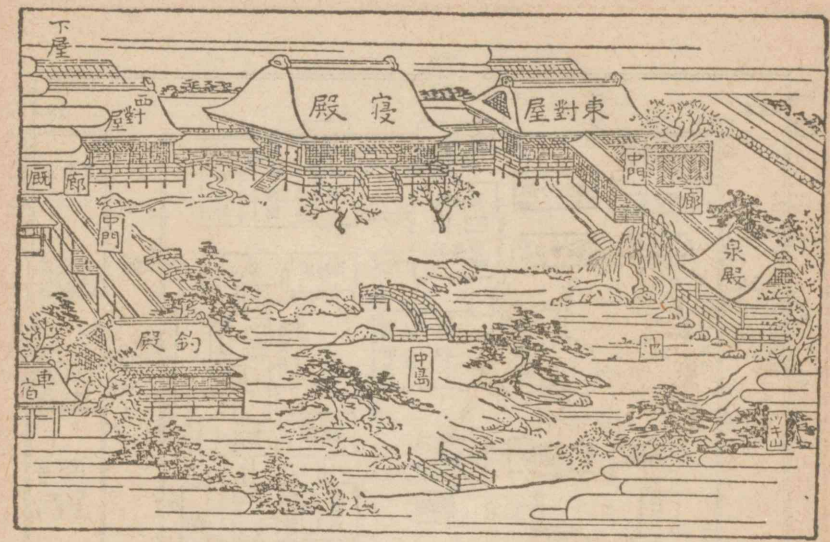
父　ト部兼顯。兼好はその三男。

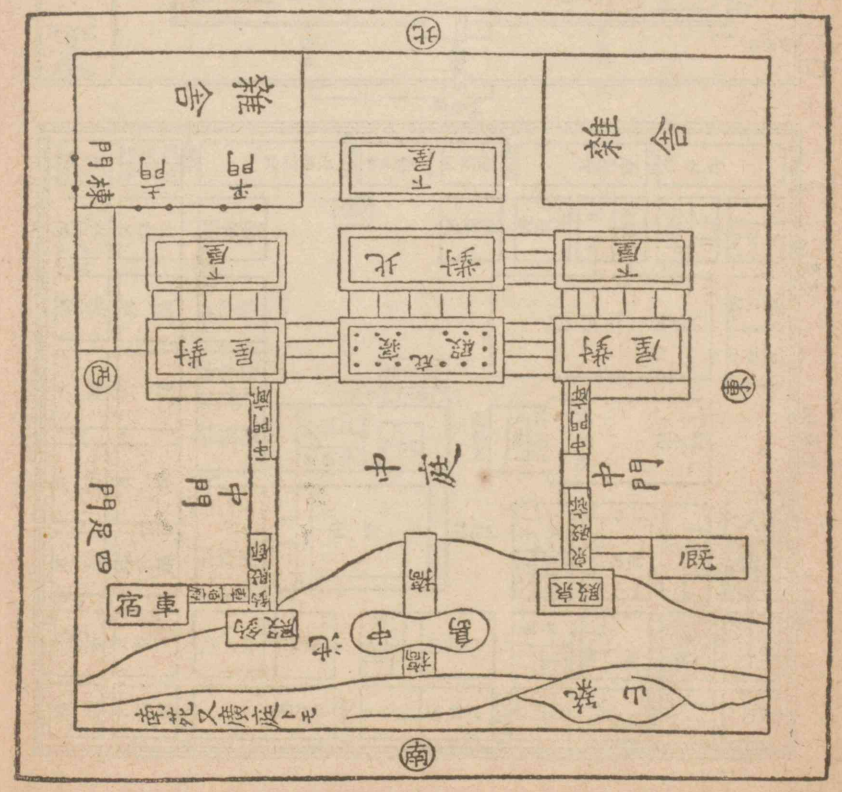
三九　佛問答

八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらん。」といふ。父がいはく、「ほとけには人のなりたるなり。」と。又いふ、「人は何として佛にはなり候やらん。」と。父また、「佛の教によりてなるなり。」と答ふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば何が教へ候ひける。」と。又答ふ、「それもまたさきの佛の教によりて成りたまふなり。」と。又いふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける。」といふ時、父、「空よりや降りけん、土よりや湧きけん。」といひて笑ふ。「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ。」と、諸人に語りて興じき。（第二百四十三段）

國語讀本 卷八

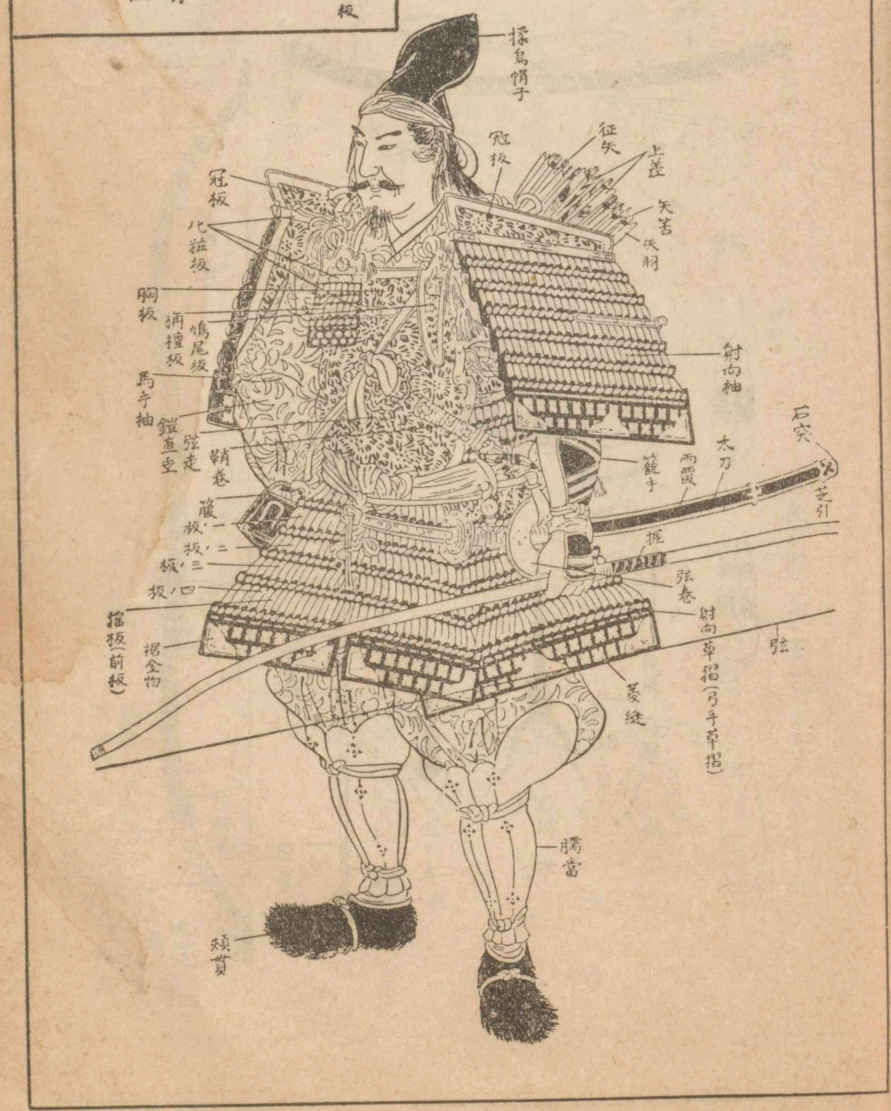

內裏
豐樂院
豐樂門
朝堂院
應天門
大極殿
大內記
中務省
式部省
民部省
大藏省
宮內省
左近衛府
右近衛府
左兵衛府
右兵衛府
左馬寮
右馬寮
內藏寮
圖書寮
造酒司
內膳司
內匠寮
大學寮
典藥寮
陰陽寮
雅樂寮
內侍所
中宮職
春宮坊
東宮
西宮
東院
西院
左京職
右京職
左衛門府
右衛門府
內藏寮
大藏省
大膳職
大炊寮
主殿寮
內匠寮
內藏寮
內侍所
內裏
紫宸殿
清涼殿
宜陽殿
春宮坊
東宮
西宮
東院
西院
左京職
右京職
左衛門府
右衛門府
內藏寮
大藏省
大膳職
大炊寮
主殿寮
內匠寮
內藏寮
內侍所
內裏
紫宸殿
清涼殿
宜陽殿
春宮坊
東宮
西宮
東院
西院
左京職
右京職
左衛門府
右衛門府


下屋
西對屋
寢殿
東對屋
廊
中門
廊
廊
中門
泉殿
釣殿
中島
池
車宿
小山

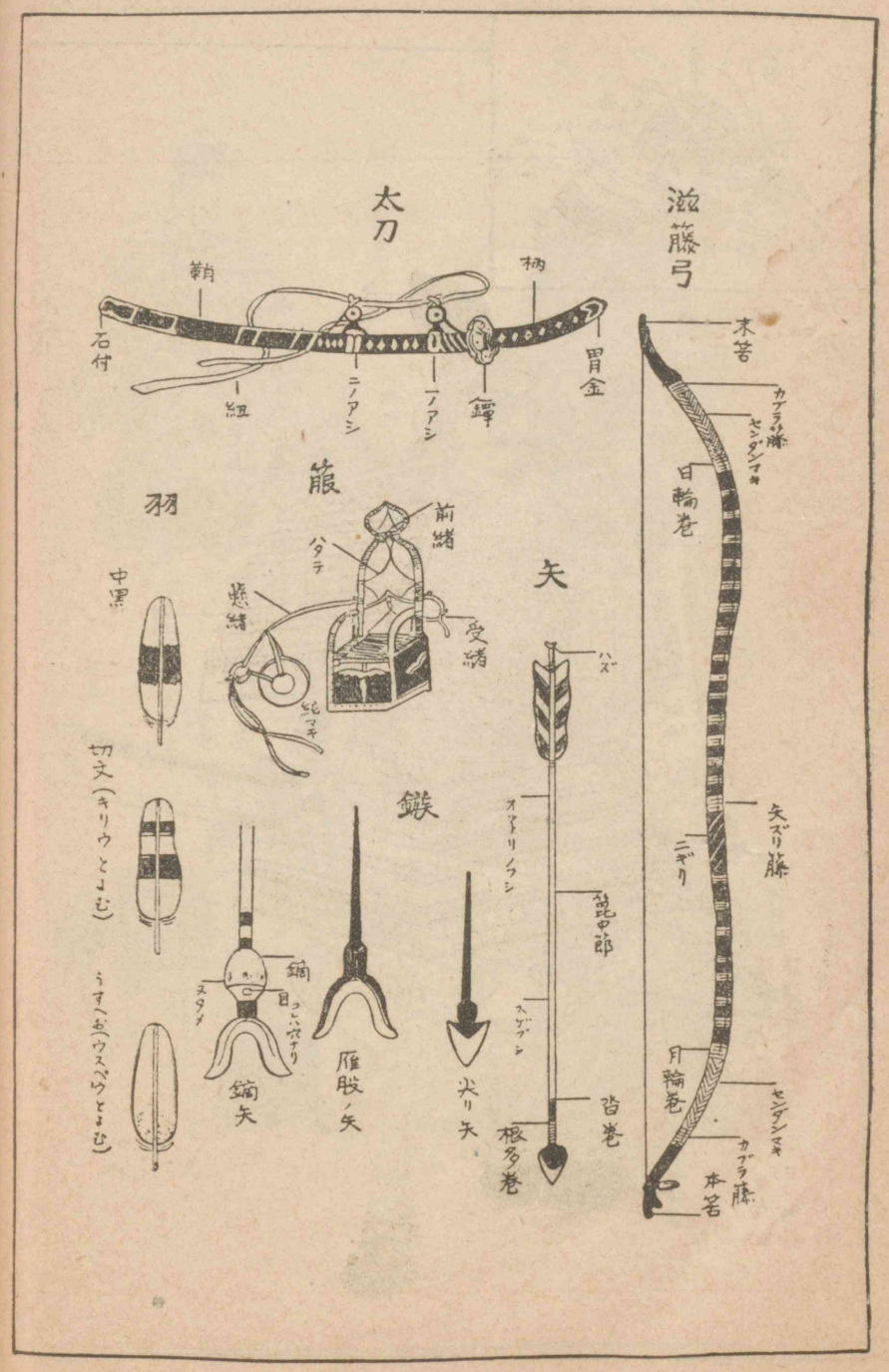

北
雜舍
舍殿
平門
上門
雜門
下屋
東
屋對
寢殿
屋對
西
屋對北
下屋
下屋
中門
寢殿
中門
四足門
廊
泉殿
島中
池
橋
橋
車宿
馬繋
山藤
南

束帶（前）
冠
垂纓
懸緒
單
袍
下襲
白小袖（ウ襟）
黒袍
笏
箭籠創
單
平緒
欄
裾
表袴
沓
隨身（前）
細纓
懸緒
闕腋袍（金襴）
野飯兒鞦
平緒
赤大口
表袴
同（後）
石帶
平緒
ハコエヲ立ル（夏ヲ格ヲ立ル上ヲ交ンリツクルトモ云）
立烏帽子直衣（夏）
立烏帽子
單
衣
蝙蝠
腰帯
色二藍
奴袴

冑
鍬形
八幡座
真向
吹返
菊座
星
鉢付板
板
板
板
板
眉庇
緒
冑
菱縫板


烏帽子
冠板
冠板
征矢
上差
矢筈
矢羽
化粧板
胸板
鳩尾板
鳴鏑板
馬手袖
鎧直垂
弦走
鞘巻
籠手
太刀
石突
芝引
両覆
覆板
板
板
板
握
弦巻
射向草摺(弓手草摺)
射向袖
指板(前板)
裾金物
弦
菱縫
臑當
類貫

直垂
風折
懸緒
白小袖
小サ刀
蝙蝠
狩衣
武家
蝙蝠
白無垢
袖括
奴袴
冠
巾子
甲
垂纓
緒
鍬
眉
風口
正装
引帽
引帽



大正十三年十二月十六日 印刷
大正十三年十二月十九日 發行
大正十四年二月廿一日 訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日 訂正再版發行
昭和三年十一月一日 改訂印刷
昭和三年十一月四日 改訂發行
昭和四年三月十五日 改訂再版發行
昭和七年十月廿五日 改訂三版發行
昭和八年二月廿三日 改訂四版發行
昭和九年七月十九日 改訂五版印刷
昭和九年七月二十一日 改訂五版發行

國語讀本新制版
（各卷 定價金六十錢）

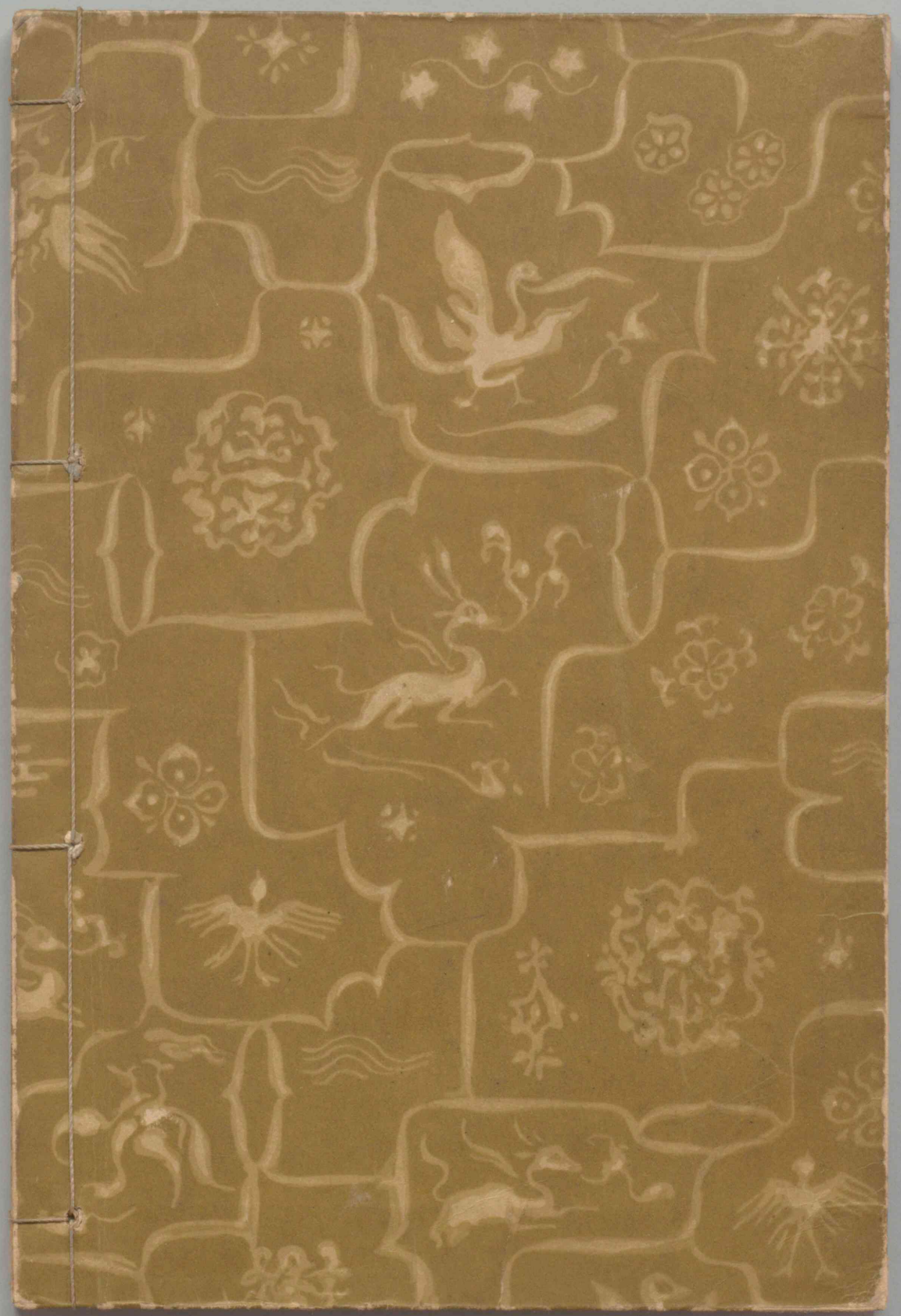
編者 上田萬年
同 榮田猛猪
同 鹽野新次郎
發行兼印刷者 株式會社 啓成社
右代表者 布津純一
印刷所 啓成社印刷部

發行所 東京市麹町區丸ノ内三丁目六番地
株式會社 啓成社
電話丸ノ内(23)二六八六番
振替東京一二〇五五番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]